自娛庵録

八

昭和七年八月上浣起筆

特別
14
1919
444

外債償還期別表（最近五ヶ年）

種別（特殊債ハ括弧書）	1932 上期	1932 下期	1933 上期	1933 下期	1934 上期	1934 下期	1935 上期	1935 下期	1936 上期	1936 下期	償還期間	備考
長期利付元金保証一般社債（大正6.7）		£ 4,000,000									昭和7.7.22	昭和五年中償還ノ
同　上　三回社債（同　上）		£ 2,000,000									7.7.12	0
電力社債（　—　）		$ 11,400,000									7.7.15	0
北海道拓殖銀行第八回（大正2.6）			¥ 2,020,140								8.6.30	0
日本興業銀行第十三回（大正7.11）											8.12.1	¥ 100,000
長期利付元金保証同市債（大正10.1）											11.1.1	0
電信電話債（大正6.6）											11.2.1	£ 16,250
東京市都市公債（大正8.7）											11.8.1	£ 8,000
年別合計	¥ £ $ 6,000,000 £ 11,400,000		¥ £ $ 2,020,140		¥ £ $ 1,057,525		¥ £ $ 6,103,640 £ 102,640		¥ £ $ 724,320			

外債ノ支拂利息等表（昭和七年上期分）

種別	支拂利息	備考
長期債	£ 2,188,067 Fr 6,317,020	六年十一月末現在額ニ基キ算出ス。
市債	£ 358,777 Fr 265,390	五年十三月末現在額ニ基キ算出セルガ為賠償支拂ノ為ノ
銀行債券	£ 1,105,650 Fr 1,955,000	1,955,000円デアル。
會社々債	£ 81,000 Fr 25,938	特殊ノ基礎数字ハ市債ト同様五年末ノモノ。貿易ガ六年一月ニ第十一月迄ノ伝送ヲ、ECCO(可)デアル
總計	£ 60,000 Fr 247,042	但シ六年中ニ発行ノ日電、長期債ハ同社債ノ利息ヲ合ムモ、之以外ノ社債ハ第四五年末現在額ニ基キ算出セルガ為賠償支
	£ 6,812,038 Fr 6,830,314	拂額ハ六年二月迄ニ償還ヲ了シ記分ガ少ナカレド、昭和六年一月以降十一月迄ノ償還額ハ六百五,000円デアル。
	£ 16,606,534 Fr 12,250,690	上記ノ総額中ニヨリ賠償支拂額ノ左記金額ヨリ記分少ナル為、昭和六年一月以降十一月迄ノ償還額ハ
	£ 2,250,000 Fr 131,590	

38— 9230

176709

自嘆老生録

昭和七年八月上浣起草

○鶏犬と牛馬ハ田園風景の大切なファクトルだ。
うんが無ければ田園の風景ハ無い。田園をそも
神代そのかの風景あるまいに鶏犬牛馬
があるからの事だ。北海道ハ如何に
寂寞であらうか。旅をすれば隣家もまい。暗くなると
過ぎ漸やく人里を近づいて先ずまづ鶏犬
の声を聞くことである。鶏犬ハ村あることを報する
イレンのやうなものだ。村人が家族と隣人の
交歓をもたらすものは鶏犬牛馬である。農田園の家

強い人間のみと思ふ莫れ、鶏犬も牛馬も亦家族である。鶏は農を教するの役目をつとめる計りでなく、豆腐屋の三里の不自由境に美味を供するものは鶏である。犬は夜を守るものであるし、日中家を挙げて田圃に出て、稼ぐときの留守を守るものは犬である。時々小兒の遊び仲間ともなり、時々家族に追随して其の無聊を破り、亦時々車の前駆を綱を曳き人力を助けることもある。牛馬は勿論人と共に田畝に稼ぐのみならず、或は山に薪を負ふる時或は草を刈る時、仕事を助ける。或は村童に背負はれて運搬

榛原製

笛を吹かしたりもする。彼等が農家の日々の大切な伴侶であることは、或は人間以上である。見れば農家の子のを愛することは家族と擇ぶ所がない。毎日の茶飲話に何か話題を求むるからと、牛や馬の健康淡や犬の人情を解する心の中の鶏の雛子の生長後ろ向き夫婦喧嘩も往々此等無邪気の談る打消さるる。誰れこの話る人間と神仙の住居を格段の相違ありと嘆ぜし神仙の長い人間の居に比すると笑ふが多いとある。田園の無邪気な茶飲話、甲阿乙巻、赤きうな笑ふの渦るこのの神仙も比べまくきであらう。鶏犬田園一庭と云ふ田園を形容し話あるが

神社に共もして鶏犬牛馬に至るまで四囲の山々に飲食する陽もかたむく夜時分に彼等は中間の方家に帰る時は先づ渓流に牛馬を浴せしめて さて己れも浴する。こゝに於て人畜一体の感がある。豈唯床の上のみならん哉。夕顔茶碗の夕涼み、下裸の赤性の肥り乳は又の顔も共の豊を競へんとする。こんも四囲の一帯にあるる彼等の歓楽云へば盆の踊りや村祀の祭礼位なるのみ。盆の十三日が二谷あるやうなり、雛祭は本年今一段と盛んであるけれども雛の見物者は らロに上らぬ彼等の境遇は衣食なるのみ。彼等は衣服の一変 ●のみ思つてゐるのみ。盆すや踊るし、正月すや寝 ゝ、長の夏も苦とせざるは自家の宝

命をもつてゐる。神仏に願かける。彼等の愛 ゝる最も楽しみは炭を焼いて みる、冬さびい榾柱もと んく焚いて、馬鈴薯なども 鈴なりに成る。家族 の団楽がある、隣村人が来んい 国楽を加へて式は 濁酒を飲むことも 式は濾茶を喫することもある。 主やの妻は 仮酒の宴 村、二三里隔りた地 く煙草と 三の報酬が時を経て漸や 都会を 外国の 村 光から都会 別天地 思はれて、恐るこもあるこ 光義を ひる戒めを 都会を足を入るゝ可らずとなす 八、時 ゝ後の丸村 掲ひのあるが実はあ金の村で

こまの失業や破産が無い。鶏犬牛馬を友とする田舎、純真の人の住む田園、今めかしきこの家許がある

○昔しから田園を讃いと句は少からずあるが、自分の大江丸の

稲刈りて天下しこわいものなし

の一句を奇とす、豪放の調ふく農家の心理を道破してゐる。田植から始まって秋収入を花々終はる農家一年の苦辛は如何ばかりか、役芋は昨日を忘れ又明日を待つ、又明日を忘れ又明日を待つ、天候は常に役芋が思ふまゝにならず、順気と共に心まんが忽ち暴風雨となり、僅かな肥料を施せば一夜の豪雨之れを流し痕をとゞめず、桑

橋原製

一茶

あらうまい汁の五ハと稲の穂

茅村

こからしや何れ世渡る家二軒

二村と笑ふ一軒冬木立

山子の鳥を駆逐すれば蝗害生じ、到底収穫すべきなし、役芋の心境は何時も失望の連続、刻々あ息を無へず、暦を繰りて肥日の迫きを待つ、天を仰ぎ地を俯し、恐怖満々なり、稲を刈り終つて、ほっと一息、役芋は得意を高唱す

めでこいハ思いこのろく

ゑしのハ北向ろろ、肥前の秋祭唄にえく

唐臼の

ろく前田の稲刈ろう、日和見も田んぼ、明日は

ミろく

もろと刈られ、稲をかるる、西

シスレく

○茶の美術ろうやと問光がある、辛抱ろう考

人民は農業に勤労し田圃の畦畔或は長く或は短かく、毫も規律なく、溝渠の両壁は崩れんとし、稲の株方は亂れて畫長差なく、積肥は糞土塵埃さえて何等蔑如の如くあらず、農業は水のみ豊に美なるものの如くあらんやと、こゝに一考むもの見るあるべし、係し若国も種々の掟を守らしむる所あるべし、蔑ろに乱雑を極むる如き、土地なる農国の体裁なきものなく、一概に美なりと云ふを得ず、予は往年二宮尊徳翁の遺訓を守る遠州掛川藩の田圃をみることあり、北海の挿秧まで縄を張つて筋を定規とし田植を為すが如く、各株の間隔一定してどこまでも見通しの得るやうな

植付けありて、一見欧州の農法を受くるの如くなるを見て、肥料は不平均にらしむる為めなりと、之れを土地に報徳植と称したりとある。二宮翁の報徳論は属一村の農家の為すことといへども、また北の諸中に属する田畑の荒谷を開墾し、又去る頃も掃除ありて、農業盛んなる所に水路を開き、溝渠を開き、屋敷を広くし、前に述べて居る所なりと、伊勢国の開墾の遺訓はいまも残り、居るものと風説あり、後ろ向けいへば日本全国に植て先づ耕地整理の行はんものは尊ぶべし、とえと云へば、二宮翁の

遺河が耕地整理を先鞭を着けしめるに偽れのあらずと思へる粘土質の地盤に溝渠を作るも畦畔を作るも正形を得るが故に すべて体裁美なるもこんが著めるべく彼の土質の黒ボクである所を捨てハ堆肥の取扱ひ明るく完全で農道ひろく而て廣いから、必ず色つける汚れが流れて喜の跡のすべる甲州人がうい、まんハ素人の目のあさくさしいうの寺ら黒ボクの土質の不毛あるも美なるを求め得べくもるから粘土質の所ハ美観の先達の奨励次第で之れを得ることの難からさるの報徳藩中の一例を以て推することを得べし 農家と美術的観念を有すること

標原制

極めて大切なるべき農国の役者の天地も見の神上なる亦健康上なる之れを飛いーくセーなる役者の美と云ふ観念あるんが偉かの労ひて、自家の庭先を花を植て目を悦ハーしむることを生活をを枯死を任かすセつてこと不体裁を思ひて自ら之れを修理を心掛けることなるる農家と美術的観念を有セーなる先輩既に必要を設け敢て新設する出し未だ之れを得ざるいのと

○毎日の暑熱に苦み、手あり次第植えの青物を取り出して漫遊してみるが、吟のかく沢田頼軒

の紋章学を概説してみる。北書に接してこれを稽
の説が行のみを定説を得ることが論定さん
ことも少からずある。往々初耳のこともあるべし
左の数則を掲して他日の参考に供する

一 公家のいうゆる家紋が如つたとえば輿車の装
飾からとれとるが、輿車が公家の常用車であつた
時代には、外部の装飾にいろいろの文様が
書かれたりして、多くの輿車が輪奐するに、その
文様が検査の為め便利にもあるとして各
家々の輿車の文様から、その家の紋を
へとしるのの自然の推移とうるつける武家
い行列のように、旗や幕や表飾や其他に

榛原製

も記載されが例論是非ありて、それが紋と称(なる家)
一 紋章の総数は大凡四百数三千種を数(る)
一 同類同形の禽獣例へば鶴を右向き対立させ
た紋るは、是らも二禽の共のいづれかを開口せし
めることが法とするもの、この模倣は遠くも
の根原を平安時代から発したるものあるべし
第時代中に狐子と、猫犬の如き、又
ずれの一を開口せしめたことが南時の記録に
見えて、或ることのいこんを以て阿吽の意
義を示すことのあると云ひ、又或ることは雌雄
の別を主とするものと云つてあるが、いづれにせよ
日形の数のうを表主としめ陰陽の為

類ひは獻物なり。その一を謝口させる習慣となつて居るのである。紋章の慣例もこれから来たものであると、

一 福島縣の或地方まへ祖父の生前寿荒くは米寿の祝儀にその子世の縁はいは家家が共同して、その家々の家紋を深め刷し荒くは備へ取つて、紋散しの衣服を新調し、祝日にこれを祖父母に着用する風習がある。なぜかなるべくその第子の異なる情況を紋章の種類に従つて、断る美観を添くるためであつて、面白き風習と言へべきである。

一 なるる第家なるも、通常多く用ひらるる紋章が

ある、これを通紋と言ふ、例へば花菱、萬のめきいこんびあるも、俗なるものを称してムダ紋、又ダ紋と言ふ、

一 法度の行粧を整後師は巧みなる語つて、紋畫して二席も三席もやり、人の良を完えさせることいふ。

とある一種の文体も新つた。徳川時代に幕紋畫仇討幕後畫びあつた。最も花言いの曽我川柳がいふ心得ちへと表味の理解に面白ある。一例を挙げると、新田足利氏の戦争を御人比べ、銭葵と釜の葵とが比べ合ひと言ふがある。銭葵は

一條の撥があつて、金の蒔繪すれば二條の撥があるが、即ち一條は新田氏の一引あるを撥へ、二條は足利氏の二引あるを撥へたものである。萬延元年三月三日井伊掃部頭が龍口の梅田雄三郎を浪士の殺さんとする時「梅の御難やのぼり龍と」と云ふ川柳が出た。これは日蓮が松葉の龍口で流難を遂つたことをかけて御人に云ふもの、即ち井桁に梅鉢を用いた日蓮上人の龍口で法難に遭ひ、同じく鉢を用いた井伊掃部頭も矢張龍口で難に遭つたことをかけたものである。

一　今が家紋の木瓜に就ては曾て一説を木瓜は蕪の

複原製

冒頭に、この文様を限つて附けたのは、木瓜は冒頭の蕪と云ふものがあるとこの紋章を得たことを動かぬ証拠である。木瓜の文様から来た文様で、日本の刺繍服の文様とされた。蕪の文様をすることは支那の文化で、今も南京の繍寺を現存する。鄭加八郎同の中にある御所の人、この文様がある。のを見ても知ることが出来る。鎌倉時代の時代、これを呼んで蕪の冒頭の紋と云ふことである。ところが弘安年間に出きた新撰集に冒頭と木瓜の事をあて、

書いてある、これがやがて木瓜の家をあらわしたらしく
為程ではあるも、

一 木瓜を家紋としたのはいつ頃であるか、公家では
徳大寺実能が平の文献らしく用ゐられた後で
は徳大寺の家紋となるらしく、実能は永治元年
の生れで保元二年に死んだ人である。武家では
これを家紋としたのは日下部氏の出である
朝倉氏である。即ち鎌倉時代で北紋が
これである、足利時代になると比較的多く用ひら
れ朝倉氏を始めとして宮永、お佐、海老名
岩佐、宮本、平、八木、大田垣、池田の諸氏
があり、織田信長もこの紋章を朝倉氏

標原製

から借へて用ひたのである。

一 葵紋は信仰的意義の紋章であって、これを家紋
としてあるものは、もと賀茂神の信仰者で
ある。元来カモアフヒは昔から京都の賀茂神
社の祭りに用ひ来へたものであるからこの植物
を一名カモアフヒとも云つたのである。賀茂神社の
神紋が葵であることの文永の賀茂祭絵巻
に明瞭に葵の紋のあるのをもってこれ
が家紋として用ひられた事の見えるのと、
又諸家紋にあるのが如きである。丹波
の西田氏が之を用ひて居る。この西田氏は松
井郡を居つて豪族であって、ここへ賀茂

此神を祀つた神社即下鴨宮がある。この地方は昔加茂郡の置かれた所である。
くらとか義倉とか神倉を新築した場所を
云う。西田氏はこの地方を指してこの神を家紋
とし、その関係から葵を家紋として用ひたものである。
徳川時代葵紋を用ひたものは名高いが徳川
氏と松平氏及び本多氏であるが、いつからか茂
此神の信仰から出たものと思はれる。本多氏は
先祖が茂の神宮から出たものであるから
えを用ひたのであらうと云ふ。徳川氏のえん
を用ひたことは就ては、えんが名家である為め
に説明をとしたが未だ一定する不分明の書者

東京製

の考へは徳川氏の家紋は松平氏の家紋と
継承したものであつて、この松平氏はもとは茂氏
であつたから、茂氏が茂の神の因縁信仰から
来たものである。寛政四年一月の日附がある。
三河国額田郡岩津村妙心寺本堂の脇内
に収められた松平信光の彫文はが義親法と銘
記してある。信光は、古来葵紋を用ひたことが証拠
を出してゐる。

紋章はどんな社交界にも活躍するものだから、こんな学
術的に研究して空前の大著を出したのは沢田頼輔氏
である。日本の如き血統を重んずる国柄に紋章は歴
史の一科として大切である。紋章は苗字に附属す

（二一時松平氏と相倚したことがあるのか）

る紋章が、其家の歴史を語るものである。昔しは誇るべき経歴の伴ふ紋章を非常な貴人は、将軍でも桜けんの紋章を貴くとされ、先祖の殊勝、祀会或は武勇を語る紋章の方を貴くとしたこともある。紋章斯く大切な意義のあるものであるから、追々と乱れて、尚美の一方を流れ、衣裳を飾られる種々の意匠を凝し、彩り、縁もゆかうもなく他人の紋章を借用したりするやうなことになつても、大切な意義が失せ、唯美的の意匠を凝らした人に誇るやうなやうな。紋帳などを飾しても見ると、昔しの又少許家紋などは極めて単純の紋を許家に就ても著けもあるのんで又しても祖先の紋帳を見ると、風流意

樣原製

匠の紋が盛んに強へて、田沼時代とまでと時の反映が西洋意匠まで入り込んである。紋章も紋尚服装の飾りとなつて、車寄せ終る川柳子をも家庫の前し処のや紋所と云いしまるまつた。当時の趣味が如何に紋の美を衒ふのみなら芸心しれかを見よ、元禄頃の花柳界の衣裳を見ると伊達振袖と云ふて紋を擬した大かぶ模様を文様がある、多くは文字などを待を配したりまるく巧又は出来たるる。こんなへ輪廓がるく形も大きいから文様とそるべきものであるが、もう衣裳の紋のあるべきを云ふことが染ぬえ或は金糸の綿、えんとあるから矢張り紋を撰して風さんれいまとまることが出来

る。他の婦人がその着ることのさいしい紋を勝手に用ひて、それが後に其の家の家紋の紋となる例も少かずある。コンナ風になると、家紋なる物は真面目の紋が無意義となる。桃作さん、加藤家紋があるのに、他に風流の替紋を作り、その服装に着けた花柳の巷に入り雅いやうなことも起つた。つまり有り觸れた紋が最も無意義となる。只だひとり其の有り觸れた紋が賢風になれば、変がよかつた。庶民が四利人からの事だいつそや好事家と実業者とが主張した同紋合の木瓜が主張であつた。自分も此紋の保存から出こうけれども、知名の人でも此紋を用ゐる人が多かつた、そこで自分の浸淫の賢風に表心つ

連(四)中の集まりと云ふことを思ひ出すから、その際丈四東伍(四)も田紋の図像で紋の沿革を仔細に研べて浸淫を試みたことの稚かん沢田の先を紹介したのだが浸淫式の分会を宴る面倒を嫌ふ人が多かつたのの惜しかつた。自分の浸淫中大隈侯の逝去を聞つた。菱の維新の始め幕二府が仆れて菱の紋の家が二束三文となつた時を好んで菱つきの古着を購ふて身を着けたことがあつた。其頃を少くとも、菱家のある時の明二重の最上の地を撰んだのが多く後藤さんであつた。そして古着もハシカく教授料ハ大切なりから振るはなかつたと云はれた。後の大抵勝手を用ゐたものだが、菱ハ徳川一家と限り他人の用ひることを嵯

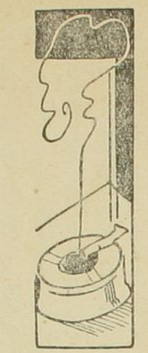
る禁じたからいもと家族とし外家族も遠慮して用いることつとめてある。すると徳川の威望の不ぶりのさめゆく紙の外国人の際、寝巻きの蔡豪をつけも揚口さとして西洋人などは大隈侯の皮肉とも見ることが出来ると西洋人などは先帝陛下と理解かるく、白板きの紙をもて、西洋人は紙を乗ってホワイトシャツが見くると思つたらあさんである。そうかと思ふと日本のるこやや通じた外国人は日本の紙蔡の多くが植物を形とつれるものであるのを解して日本人時ウエジタリヤンであるから、紙も美くい植物だとふれこまるがこれも一知半解である。

榛原製

緑蔭閑話

落首

金谷一輔



◇曾呂利の落首

現今は新聞や雑誌といふ機關があつて人民は思ふまゝに自分の意見を世間に發表することができますが、昔はそんな重寶な機關がないので、今日のビラ廣告のやうに、人寄り場へ落首を吊したり、糊で張りつけたものです。

羽柴秀前守秀吉は、山崎に光秀を破り柳ヶ瀬に柴田を誅し、權勢日に加はり、近國の大小名は皆膝を屈めることになりましたが、四國の長曾我部宮内少輔元親は、敵對もせず、歸順もしないで、たゞ天氣模樣を見てゐる暢氣さに、氣短かな秀吉公立腹、忽ち四國征伐を思ひ立たせられました。かくて泉州堺より御船出と定つたが、日取の一點が甚だ不確實で、何月の何日御渡海といふ御沙汰ゆゑ、堺の市民は當日御道筋に砂を撒き、水を打ち、戸や窓は悉く閉し、商賣休んで御待請け申してゐると、そこへ『御渡海御延期』との御沙汰。それが一度や二度ならまだしも、三度四度と來たから耐らない。堺の市民は苦情たらたら。しかし誰一人秀吉公に面と向つて苦情をいひに行くものはありません。そこで落首ができました。

一體落首には作者の名はあらはさない筈のものだのに、この時の落首には麗々と『曾呂利新左衛門』といふ名までつけてある。その落首は、

大閤が四石(四國)の米を買ひかねて
今日も五斗買ひ(御渡海)
明日も五斗買ひ(御渡海)

これを一同は痛快かりましたが、堺奉行は感心してはゐられない。忽ち曾呂利を召捕つて秀吉公の御前へ引いたが、秀吉公はお咎めなきのみか、却つて曾呂利を茶の友としてお召抱へになることになりました。何が仕合せになるか分りません。

◇大黒舞

天保年度に閣老水野越前守忠邦が、自分は妾十何人を蓄へておきながら、天下に向つて節儉しろ始末をしろと命令しました。そこで忽ち西丸下の水野の屋敷の表門へ

水野み(水飲み)百姓は越前飯(一膳飯)

も食へぬ、どうか忠邦(無償食に)しておくれ

御徒士目付が馳けつけて引剝がすと、その後へ直ぐに、大黒舞二つと題して越前といふ人は、一にいろ〳〵御布令事、二に憎まれし報にて、三に下つた上地沙汰、四つ世の中賢がして、五つ因幡のお手傳、六つ無駄金使ひ捨て、七つ雛儀となりにけり、八つ屋敷へ石が降り、九つ後悔するうちに、十でたうとうお國換、大逆舞を見さいな

といふのが一つ、もう一つは、

一に越前ふんばつて、二に日光つゝがなく、三に酒井を困らして、四つ世の中蹴散らかし、五つ因幡を堀りかけて六つ無理なる事ばかり、七つないこと言上し、八つ屋敷を取卷かれ九つ、細かに毀されて、十でたうとう引拂ひ、テンテコ舞ひを見さいな

と書いて貼りつけました。この大黒舞二つで、閣老の失政は十分に指摘されてをります。

◇十一代將軍

德川十一代文恭院殿家齊は、德川全盛時代の將軍で、隱退しても大御所と僭稱し、太政大臣宣下も京都に上つて拜受せず、勅使をして宣下を江戸まで持來させ自分は御禮の參内もしませんでした。そこで日本橋に落首を貼りつけたものがある。

參内もせずに太政大臣は

これも武將(無精)の初めなりけり

すると、翌日その隣へ

武將(無精)ともまた不肖とも

いはばいへ

位(食ひ)過ぎては動かれもせず

◇陀羅尼の模作

幕府の長州征伐の時、三ヶ月の戰爭後に、勝安房は幕府を代表して、宮島の大願寺で長州の代表者と會見し、忽ち休戰となりました。この時、大阪にゐる征西の將士が競つて陣羽織をこしらへました。

すると間もなく休戰となつて、折角の陣羽織も拵へ損となり、何れも澁面作つてゐると、心齊橋に落首がありました。

ホン、アホーダ、ベラボーダ、ノウ、マケチシミ、マニアハンニ、ジンバオリ、ハリコンダ、ソン

これは眞言の陀羅尼を眞似たもので、そのもとの陀羅尼といふのは、

オンアボキヤ、ベーロシヤナ、マカモダラ、マニハンノマ、ジンバラ、ハラバリタヤ、アウン

といふのであります。

◇舌ベロリ

米國の水師提督彼理が軍艦四艘で浦賀へ乘込んだ時、江戸の町々への落首に

浦(裏)賀見なくちや表ちや駄目だ

和親通商で舌彼理(ベロリ)

◇四　書

寶曆年間に幕府の儒臣林大學頭信光の邸より出火し、折から西北の風が強かつ

たため築地邊まで延燒の大火となりました。その時の落首は

大學が孟子譯(申譯)なき火を出して

論語同斷(言語同斷)珍事中庸

大珍ではない先つ中庸の意味。

◇落首家を參らす

江戸富士見町御寶藏番の中村彌三郎の話に、江戸第一の落首家が自分の狂歌七百八十首を淸書して京の冷泉家へ送り、『何とぞ點を賜はりたい』と願つたところ、その後一向に沙汰がないので催促狀を出したところ、折返して歌集を戻して來ました。開いてみると、點は一つも付いてゐず、卷末に『落首』とあつて

敗島の道(本歌道)を横切るかま鼬(邪道の狂歌)點になるべき(鼬年を經れば貂になる)言の葉もなし

◇動かぬ艦

前に申上げたペルリが浦賀に着いてから、日本中の大小名、殊に領内を有するものは、海防の準備に現を抜かす有樣、中でも水戸の烈公は寺院の鐘を潰して大砲を鑄、西洋式の軍艦を佃島で作らうとしましたが、捻釘を製造する機械がないので、鑪で一本づゝ削り出すといふ手間の入つた作り方をしました。次に碇綱を人間の髪で作らうといふので京橋八丁堀幸町伊勢屋吉藏に御用を命ぜられたので吉藏は御用提灯を洲崎の原に立て、毛梳用の椿油は伊豆の三宅島から樽で取寄せて碇綱はできました。かうして製造した軍艦は旭丸と名づけ、こゝにめでたく進水式を行つたが、艦は前上りの後下りでチョットも進まない。そこで世人は此艦を旭丸とはいはずに厄介丸と申しました。その時の落首に、

動かざる御代は動いて動くべき

船は動かぬ見る(水戸)もなき哉

◇恥は百日

本所の津輕越中守が江戸城内大禮の節に、束帶登城につき、豫ねて近衛家より語られし轅を用ゐ、これを廣く世人に誇りたさに往復道をかへ、かへり路は兩國橋より川端を上り、埋堀の方から割下水へ迂回して歸邸しました。當日この非禮を咎めなかつた雁を以て、大目付、御目付、御徒士目付、御小人目付の役々は、御目見差控、押込などの刑に處せられ、越中守は百日の閉門謹慎を仰せつけられました。そこで津輕の門へ落首、

惡い名を世に上げこし(上與)の津輕

殿、見榮は一日恥は百日

◇菓子づくし

江戸城の塀の修復は年々莫大の費用を要するので　塀を取拂つてその代りに松を植ゑました。すると落首、

この頃はさても可笑しな(お菓子)

公方樣ある塀取(有平糖)りて

松風(菓子の名)にする

◇女犯罪

寬政八年九月、江戸市中各宗の僧侶で

女犯罪のもの九十九名が晒らしものとして、日本橋の、今の村井銀行のあるところへ晒されましたが、この傍へ貼り出した落首は、

念佛の金も女に入りあけて
　珠數つなぎとは至極尤も
我が祖師は四度の難に遇ひ給ふ
　われはこの度初めての難

◇ふる家や

芝田町の薩摩屋敷で從容坐談の間に西郷と勝との間に授受を了つた江戸城へは間もなく官軍が入城しましたが、當日市中のところどころに落首が貼り出されました。

ふる家（古池卽ち江戸城）や
　蛙とび込む御簾の音

御簾は御所方卽ち官軍を指したもの、落首について記憶に浮び出したまゝを時代の前後に拘らず申述べました。

——（完）——

たぬき

林學博士　川瀨善太郎

◇

「たぬき」は狐と並んで、何時も妖怪談の種となる。そして「たぬき」といふ言葉を耳にすれば、そゞろに幼時爐邊にあつて古老に聽かされたかち〳〵山の婆に化けた「たぬき」や、文福茶釜となつた上州茂林寺の「たぬき」のことを思ひ浮べる。「たぬき」が古寺などで髯むしやの大入道と化けて人を威かす事や、月夜に酒德利と通帳とを携へた小僧に化ける事や、或はお地藏樣に化けたり、賣卜者になつたり、醫者に姿を變へたりするといふ傳說は、我國民の頭に深く刻みつけられて居る。

又「たぬき」は書畫をよくすと云はれ、今日でも「たぬき」の眞筆などと稱せられて居る書畫類が尠くない。その狐が多く美人に化け鼻下長野郎を訛かすに對して「たぬき」は小僧や法師に化けて多く婦女子に戲れるのは其素朴稚氣寧ろ愛すべきものがある。

古事類苑にも「五雜俎曰、狐陰類也、得陽乃成、故雌牧狐必託之女、以惑男子也」と云へり。吾邦にも昔より兎角狐は婦人に化たる例多かり。然るに狸は如何なる因緣がありけん、茂林寺の守鶴を初めとして、いつも……法師の姿になれるものをかしからずや。」とある。實際「たぬき」は古來の傳說にあるやうに、妖怪變化の能力があるものであらうか。私をして言はしむれば、有ることも言へるし、無いとも言へる。

◇

抑も「たぬき」は晝は巢窟の中に靜に眠り夜は盛んに活動を始めるものである。古寺やお宮の床下に棲んで居る者は、夜

○高敎東中張（？）帖一冊を得たり。元金剛山中の鶏肋雜錄と同巧のものなり也。他ちる和のよ抗本のものなり、海内絶ちて稀なるものなり、陶物紀之を載せ、雜きものなり、集の鶏肋雜錄の一とか、恐らく然らん。之れを妻が鶏肋雜錄の一と外あるも不可なるきを知らず、即ち冊標紙目を附し鶏肋雜錄一集二集三集あり三集以外別集と云ふ、雜錄一集二集三集の内容一を保するを皇あらざるも大略北集の内容一を保するを皇あらざるも大略たるのみ

一北魏造像光背銘　武平六年

八月二日記

一 東福寺四天王寺瓦 拓本
一 鈴賀郡牧拓本
一 狩野時川院西行
一 駿州志太郡賀茂寺大法天王鏡口拓本
一 名古屋城天主閣鉛瓦印図 一 故世軍慈恵銘 宣伝票
一 近衛家七帖献上三図 版本
一 川崎千虎画 墨龍書 一 銀鶏引拓
一 長三洲 謝状 版本 鈴木梅仙
一 下ノ関平家古墳図
一 狩野探川画 一 安問所以五顆印影
一 天保八年慎徳院自刻大黒天 拓本
一 大津絵版 一 千帝画 セキレイ
一 武白家歌 墨書徳神神歌 模刻
一 藥師寺瓦拓本
一 大正九年発行紙上ヨリ図版
神宮の宣伝書

榛原製

一 利休好石燈籠図
一 地田社古印
一 赤地山展世流後印影 一 山東孔廟琴器銘
一 貞享三年 奈良興福寺奉加書 版刻
一 大和郡山城古瓦拓本 一 漢醸銀拓
一 香椎宮遺瓦拓本 一 漢鏡 拓
一 金澤称名寺四寶蔵王台座銘 拓本
一 近衛家の寶帽 外一 一 六宗庵図
一 印度仏陀伽耶釋迦像光背拓
一 細字拓本二枚
一 刀剣銘拓十数枚
一 谷朝 鈴木百年翁記 書文 幸田物嶽
一 境井八卦鏡拓本
一 観杖柱 前天一寺伝 櫛挽南長寿 版本

這般のコレクションは、往々偽造に陥ってゐることが多き
を惜めて、厳味があるが、まだいコレクションは其人の人格
や嗜好に因るのだ、一見すると直ちにコレクションナー
が如何なる人であるかを知る。この冊子を貼りこ
まれた雑誌は多く金石に属してゐるが、他の考古
志料も先づ〳〵可なりのものである。中には絶滅に帰
のものも収めてあるのが新しくて、実の時
を得んば面白く感ぜられる。博多
で出版した梅南の杉想天一の枝を観る長崎
漢詩社の長と渉が墨匠絵木板画と共に
同の刻本や大正九年新発行概上から義に出勢
調査の宣伝書の教世界一恵美鋼の宣伝書

此の画家鈴木百年、幸四郎板画、菊池芳文の
名刺などは、時を経て大きくなるべき
ものだ、永拾家を後を思ふ親会が無のが取り上げ
きいものだが、こんなものを活動するも採物者の
人を在るのだ、

八月三日 曇

○安田義次郎の本所横綱の感想のものの
のことがあるその時は今より義次郎は義しかと行
御感住であるが、その家は忘れ〳〵彼賞金を貰し
たのだが、安田義次郎は、横綱の
前の義こそ見過つたが、そして過れ義がつかなん
だが、あの感銘の田安の田部であるとこと知る世
間の口義恵をへやつて田あいつくりかへつてあ回

と云ふことが、大変笑さいたゞい恢実を受けてあ
ゐまつた。
田い舌を五寸叮に移す
の狸の睾丸ハ曼荼羅こと云ふ言葉ハ古くからある
が、この奴の睾丸ハゴムのやうでよく伸びると云ふ
形容と見れば見られる話が、ある話に、金箔を伸
す時に「叩ぬき」の睾丸の皮で金を包んで叩く
のが法であつて、叩きに叩けば金箔ハ曼
荼羅くんだりまで伸びると云いたゝもの。これも
初めて聞くことだが、或の北の地口の輪祇なる
いうと云ふのもあるさき、言がよく似
てゐるし、おまけに叩ぬきの皮を包丁
するのだから、輪祇も因縁がついたもの。金箔

榛原製

金箔の叩けば九千人分の一枚の厚さにまで薄く
することが出来ると云ふから、曼荼羅ハ曼荼羅と云ふも
強ち誇張ではない。西洋でい金箔を展ばすに
牡牛の盲腸の極微薄な外皮を用ひて叩
くと云ふから、叩ぬきの睾丸の皮を用ひる
と云ふ事実と思ひたい。

の資本主義の悪魔が勢威を振って跳梁
を極めつゝあるかを見んとして、種々の研究を
するまでもなく、紙巻煙草と此立する七八倍の大な

複原製

るデパートを見んが、まんが即ち資本主義の悪魔
であることが分る。役者の別産小商人の及ぶもつか
ぬ資力を以て、百貨を統制的に販売してゐる為
に受つて利益があることとなるとは、如何なるものか
自家の業務中のあるまする。小商人の別産之れと
太刀打が出来ない。紙巻煙草の産出の主流の商店
があるけれども、別産デパートと競争が出来ないので、
今い皆な滅びつゝある。これ迄もたびく再ならず
なかい、紙巻のドンナ産物、或る三四の除いがあつても
販売の償が所へ入れば、なくも外面を繕ひてゐるよう
なれど、然るに巻の四やうな不景気とすると云
早どうしても、拾う資なれば、或る立派な商店連

会して大デパートの陳列に降服を申出でゝ、みると所
変る書きこなしをしてゐるが、実際そこに現出されあ
る日新しい載事実がある。そこには若干の店員が
差押を喰つて哀れな入口を枕に泣き合ひ
つけてゐる。恐らくこれを直ちに店員がまづいくつも
あるこの相違をこゝに別産日資本主義の無一郎制を
振り回すことを許せば、小商業が将棋倒しに
窮滅を生ずることは知れ切つたことである。大都
会を拉して既に然りである。小都会に於ては高更び
あらう。無一郎制の資本主義は商界の暴君たり
ある。恐らく遠からず之れを溺する大反動が生し
て波瀾を捲き起すことがあるであらう。

東京製

○国民教養全集を欲する「文書」も欲する大隈重
信侯」は今日出版部より刊行することゝなつ
たので、其の仕来を弁する一文を巻首に載す
其あらまほしきかな

八月四日記

本書「文書」も欲する大隈重信侯」は帝室編纂
官補を歴任し民間多年心血を注ぎ力れる
り。世上侯の伝記少からずとせども、諸家執筆の文
書と称し、侯の書簡を捜し、侯の書簡を指して紀すあるこ
書を指して紀すあること。特に侯れまつはる諸般
の疑案、侯を証へ、侯を渝りんとせし実相は、此書と
擬り一遍熟読するに、究から電

氣禁の照應を次のとおりと一般、諸公判然、侯の真面目を顯はん、拍案快哉を叫ばしむる快著、本書とする。本年偶ま侯の亮後十年と方り、四民敬慕会い度の為め日比谷の公会堂に於て盛大なる追悼の式を挙げたり。北日巷の人衆発起人の名を一千五百の多きを数へ、又、四敬慕会いとなる先き若者こ活心も、此書を刊し、当日之れを侯の墓前に献し、且つ之れを発起人に頒ちたり。或日、某氏書を評して、感を表するの御書を以て到り、本書を購はんとする者、素と

複原制

無慾恬淡、世を忘れ、僅かに数慕会者発起人と頒ちたる迄さん心、諸方の需めに応ずるも能はず。思へらく、這般の著、侯の曙近、者のみの私すべきにあらざるなり。

公刊度くは世を警行ハ、社會を益し、且つ侯の偉績を顯彰する所以なるべし、乃ち敬慕会と高議し、西宇早稲田大学出版部に於て之れを公刊し、度く世の需めに応ずることゝなれり。依つて聊か其の顛末を記す。

○北ごろ帝国政府の抑圧に屈せず、第の蓋世の士、七人の句を起し、そんい、

八つを射ぬ姨山子の弓の上手哉

この作者の伴かもいが、さとりの句であるから、何がし
か高僧の句であろうと思つてゐる。尚は古良人の楽
山子の句を過つて見る往き金のようがある。楽
山子はどこともなく俳味のあるものだ、俳人ゐは受けの
よい題材である。隠つて姨山子こそ実のせて心
つよい句を自句が多い

左ゐ二三を録す

光の中や姨山子の前も恥かしく　一茶

秋まつの我を待くるすかいしこうる

お花を細腰高き姨山子哉　芝村

降る雪を掃ふ気もなきかいしこうる　一茶

御不掃に秋まん真の姨山子哉　芝村

榛原製

蚊帳の向に夏の月蚊を庇ふもの五月
あしと月に蚊の為めの傘の中を光
ふの心

涌めりの俳句人の姨山子哉

秋の蚊姨山子の袖にすがりけり

名月のけろりと立しかいしこうる

口旭花の詩こうく、蚊が真ふ人　蝿如俳君子真俳
雖異形、均為口服死、暑中何人も庵ふ哉此
の真ふ人と俳君子とである。俳うゐ一匹の蚊の為に
刺されて夜寝がそんあかう、かゆみを覚えて一刻
も安眠を得ず、一茶の所謂る「一つ蚊の光まつて
ちくりくうるる」で其の眠つて気もふ所ゐ蚊憎味が
ある。去かし蚊も考くやのうゐ行つてい蚊ふうも及ば
ぬう、一茶の句の非凡なる振あるを蚊ふ合けもやるの句があるが、
日生ゐさいことしの蚊ゐも必いんけりと詞もある

[illegible]

[illegible]、[illegible]のごとく懐んば段も一概に憎むべきにあらん。
但此書の如く好り難いとあるなり。
○暑熱の暑熱に伏く難く、涼味あるを何物かうるとも
とも物色に入りて遊めども、さるこの絶へてあるる。
西物色の出し示すとるんば、芭蕉翁の六翁記
岩さま暑熱と謂ふ法は[illegible]此者にあるべしと笑
つて曰ふ。猶ほ書の暑を除くの兵法
書なり、但此書の巻尾に「維時慶長十八年
癸丑初秋吉辰」とあり、予の寓居なるまで
芭蕉翁の入りあるを見る
ハ[illegible]が初めもン、[illegible]書[illegible]暑
熱と我つて此一冊書を謂ふ一快のあらずとも

複原製

ず。余が銷夏の一法は是なり。
○暑熱と伏くこうるる古人の句集を翻しか
涼味を吟じ句を書きつく

涼しさや鏡を離るる鏡の影　[illegible]
松の影ふみつくすまで涼けり　[illegible]
すずしさや手は備ふる松の影　[illegible]
瓔珞や力一杯きうくす　一茶
清瀧や波に散りこむ藤かげ　苔蓮
涼しさは墨絵の松を透て籠る　川柳
山里の松の影うつるきこるんと吹かぬひを
さみしかりけり　蓮月
人に世を忘れこう物しばしうくさむ

山の夜雪

涼意の豊ならぬ漢詩いと早やかてひとあきの多ひ

○鐘聲涼月江氣夕沈山

○樹陰深夕折螢先度　昔淺手松蟬未知

○涼聲度林風如雨　碎影搖空月在松

○夜衛四蓋前雪先揚　一洗人間苦熱忘

○涼意漲君庭　深井梧葉一聚

○雲光涼新隆　山意彩(紋)妍

○秋氣新々霧　燈光寺々樹

○黄丈夜聲　四時移色寒

○當根秋夜淨　今々倦孤心中心自醒

○亂瀑聚蒼壁　石廊雲無人　高寒不能支

○光夜致點雨　乱雨空翠幾重山又山

○鶴陣遠爭烟　夜樹霧痕涼入夜空樹

○平生亦想無窮　裸体騎人六月天

○高峯千丈雪　寒光為盃中　倒飲盃中影　酌

中生雄風　酌者

○亂雲埋樹黑　驟雨庭蟬徒

○廚冷分山翠　樹空入夜烟

○絶壁下飛流　四時林端出　溪路亦無人　濤

々隨夜

○霧中偷燈影　烟松護月明

○夜夢四危石　日色冷古松

○岸間山沈み、天低浪入雲
○龍從九地躍、虹自半空飛　孤洲清晚霽、
詩不復心
○玲瓏八面起清風、
○山鏡應度空江月、汀月寒生石瘦梅
○江流撼岸動、山影壓帆來

○茶碗を安しと云本を得て茶日玩賞器を定る、扨其所の茶碗四十餘所の輩を用ひさて手つく形素焼茶碗の如きものにて茶家の番面ぶうふらと呼ぶこと有り、形貌さまくにて皆々あと故段々、日本にて拵る未米等之れを倣ひ

榛原製

作る利屋これを及ばず、流れて支那より名工あり
りとうるつうるる。此器を心ゝ心者の尤も喜を
用へこれ、口と把手とあり、口は指を上を仰き縁が
いのが多いが往々長いのもあり、把手は多くの場
合口と両方を保つて心ゝあるが往々細く
且つ長く、取扱ひ悪しきものを見あらこもある
把手の内まハ形をなすものあり。把手を開き
上訣る此形のものあり瓶のつるの如き
[illegible]を附し把手を代ゝ此ものある。瓶の
大きさや形貌に関して此等が工夫されてみて、さこと
行んとも云のんるい味がある。其のツマトまハ連環
がある大ヤ、形や特るなどの口を宮寶を離れて心り

蕨や胡桃などの種類を形とつくることもあつて、器の縁へ
多く北斗の形などを附されたものを雲峰、西瓜、瓜、鳴子、
鳴子、麟子、蕨、蕨などの銘が見えてある。北斗
ウマミも器の本体と調和してゐて、多く技巧を弄
さず安定を離れてゐる所に妙がある。紫派流の
の茶碗の規則正つた形であるのに反し、これは全く不規
則である不整特色があり、紫派の器は人間の把玩
するに適し、これは仙家専用の器と云ふ
べきもので、支那のある時代の土ひねり芸術は全く
鄙俗に陥ることがある。北斗標記に「東山御
拘茶餅図」とあり、御拘の斯のものあるを思ひ
あぐ而は考へ、此流十七年八月宮秋琴茶

標原制

室町とあつて好事家本也

八月八日記

口吟の歌集中四人の歌集二巻を
焼く、北集吾同の穴深民子の歌集に穴深
氏他後の家の市蔵の金子家の
又吾家家の親族に、序文を乗せる民子
は前後の人のつたる人沼の幸
典の他に不也、文政戊子上木に係る、巻末に刷る
穴深友久の跋あり、這般郷土文献を山もと
すれば乗るに足る一奇書なり、金子祖母如子の
歌も亦和歌の技味あり十数冊の稿本今者家
に蔵す、民子と或の座敷あり、と試みる験
もなし、年代を寄せる民子は先年

るが如し、今方まきら湯ふの詠歌を唱す、住位と
もに元くさんと、北の湯ふい余が少時忘れく海じめ
る所うた懐こうみあるが故ろう
雲母といふもの白ものあるがちんとそゆくゝ山川の岸
とう春つゞさかうゝいとおもしろきこれ
山河のこきたれさる所ぬちかつらかいるけしきを
いかてかとらん
きちにきつ起てこんいやとうべきにあらあやし
けるふ屋ゝめくりいかしもかこ元出行
もさうしとつちの所ゝ北よりにひきな
ぬといこしうるひし四方いこ那山うそやれ
ふうこうといふ石河ちうそのるとりうるん

いとゆかはるけるかりそめろこうう此すすひよろ
つのつけてわひしらんときゝ山さとのめるも
ぬさはるを心花うきかさもあう
あしのやのいふもきき那から雪のこうし九え孤い
うとまんもせす
那きぬぬハ夢もさいらて岩ひけりあくしれ高き
山河の春

○日支事件が結局哲と義着ひあくうか、湯沙新聞家
が如くこ成り自行であるうか、日本の天流の大河是ど
あるが、とんを思へめと真こ憂愁こ堪くるいものがあ
る。若し日本が獨自の力を以て之を處理し得ると

横原制

すんで強ち困難いらいが、日本の国際聯盟に加盟したのであるから、その牽制を受け易いことは、実に尼公千万である。千万歩譲って言ふと、日本は手が七足が七を箱めらんとするようなもの、心性拙を受けつつ動かねばならぬ窮屈である。若し日本が連盟に加入しもしないとすると、どんな自由な運動を得られるであらうか。今更云ふまでもなく聯盟の加入を国策を誤つたものと自負する。随つて行き詰まれば聯盟を脱退すべしと主張するものもあつて、折りも折り満蒙問題が聯盟に持ち込まれた。世界の平和を保つべきこと、言わば国家が国際的に対する義務である。

いまの有史以来惨憺たる毒を流した世界大戦の後、日本の如き正直者が、その美名を惑はされて深宮奥く加盟したのは、今考へれば莫迦げたことだ。全く世界強国のラダテを乗せられたのである。日本が日露戦争に理屈をつけたのを定義でもあるかの如く、日本は悪人であるのだ。理屈もあるからと言つて、いろいろの難題を要求したが、実は東洋の関係のきいことを手を出して、西欧の関係、国を怨恨を買ふ割のよろい役目であることを義務づけられるいお人よしであるのだ。

全体日本は何人の為めに北の聯盟に加入したのであるか

若しこれが為に世界の平和を保つ機関であるとせば、
力が東洋に及び、日本の敵国を牽制するものであるべく、聯盟に加入する義務あるべきが、事実これも聯盟
は西欧の平和を保つの機関であって、仏国や英国が他
日の獨逸、日に對する防障たるの為めに設けられたる
ソンが如く、北の聯盟の主張者たる米国の如き、
聯盟をして、露国の如き最も聯盟に参加すべきを、
これを大国なかるべしとなすいかん、北等二大国と逆し
て聯盟の初めから世界的のものとなる日く、米露は西欧
の事に関せず、利害と利巧と迎合の如
い時、こうして聯盟に秋波を送り、聯盟もまた嬉しかつ

て之を迎へたるなり。日本の立場から云へば、日本の国
も亦備へなければならぬ如く、米露二国の聯盟に加はつて
なるべきことが、日本の聯盟に加盟の義を十の八九
まで失ふことになる。日本は西欧と事がなければいや
でも力を盡して義務を尽すことになる。然るに
米露と事端を起した時、米露は聯盟に関
係がないから、其の規約と両国を律することが出来
ない。東洋を乾と乗じ云へば支那は有名的に日本の
底人国であるが、之れが国家的一体を見て
居らないので、自個の利益のみを聯盟に投じて
聯盟は之を許してゐるのは、日本を元のまま難有
迷惑で、聯盟に席がある以上、満洲事変の

種々の悩みがある。引くも行くも行くと日本は聯邦に入
参加しても何が利益であるのだらうか、唯だ西政の為
め奔走するのみで、東洋の事を考へると、東洋の平和を
き西政政治家は順逆を顧倒して日本を曲者と
まうとする。こんな莫迦げた聯邦と国の名を
を犠牲にして追随して行かねばならぬ理はどこにある
するのであらうか。西政と利害の関係なき日本は来
の如く露の如く聯邦を脱退して孤独を免かる
策し、日本は元来孤立時の日本でなければ。力の有する
に理も拠もなく、訥直国が聯邦を去り日本をあしざま
する報告しても、聯邦が日本を誣める時日本が聯邦
を脱退する時であらう。

八月八日録

横原製

日ごとに一茶の七番日記を繰り出して読む。著書西政
のものまねをして読み、拙句を作り、少うさんとも戦面
五十も更らに忘れもせず行けば、金のうるおかくさるを
笑ふ。先づ此今の暑候の句を拙出せんに

暑き日やヒヤヤクと算盤抜く

夕立を三日待やして三粒うる

日が長いくと赤ひれの死世こうる

日が長いうんのらくらうる

光の身は日の永いうも泪こる

赤ひる身は勿体なさの日永こる

七月の大べら坊は暑こうる

涼風も隣の松のあまつこる

ざんぶりと一雨浴て除の涼
畫こゝや石菖鉢と飯いぶしと
まんがーが宿の蚊帳の名所こゝ
世を住ば蚊のうるさき蚊もなしなり
出よ蓑鎧をおろすぞ出る蓑
そんくと親からさいぐ蓑こゝ
人の世の秋を さんけり苔清水
涼しさやおけの中もそこの山
つまる日を出もぎイチまくれ
秋の蛍めの蚊帳につるこゝろ
涼しさや舟投つける馬の尾
貧焼を除しに句の中に

七夕やトンとも云いの蚊の家
吹けば秋が住なれも老の梅こゝ
掃溜を山と入れらるゝ秋の月
我門や北東限の雪捨場
我つやあ鶏も鳴かす屋ひらき
炉を開とえもやつぱりひらき
例の高欄跡宮の浦に風刺ある句い
我ゝと我つまくや鳴る縄
雪ふけ〳〵都の北ゝ待あら
江戸すんな大音寺や時雨
きかぬ氣の江戸の門こゝ柳こゝ
是程まけちゝ稲か都こゝ
手傷つて乱世も拾へ雀の子

梁塵の風にはやせ筍の度すけり
筍も思ふあるく生さりけり
眼され大筍の曲りけり
野鹿ゐる所ゐれ筍のようれようれ生出る
どんぐりの根とおらんけり
北やうに枯もさはぐ芒こる
人の世の条瓜の皮もうんれけり
芒穂ゐ棒のやうゐる蔵こる
鐵釘のやうる蔵も都こる
生る世を何んの因果で庭の松
炎熱ぞ年が若よと若すいと
蟬鳴くも老の如きこゑあるる

あまり湯のひらりくとのぼこる
花菖ゐや雨はあるひる角田川
雪佛犬とる佛がお姫こる
世の中はかくのごとく白雪の佛はつゆと消く餘
いけり

△焚るどへ風かくんゐるおちる葉こる
おるしくい汚ぬ先れとけよ雪
消よ雪汚ぬ先れとくと
庭の鉢雪ゐ消ゐるけり
蔵城しん蛙もとくと出す田植こる
蔵蔵の茅ないわーを耶ゐ田植こる
天下太平と立ちるかーーこる

、晝飯をぶらさげて塔のかしこう
ふしきや也生れし家びけの月
さし南り南もるけんど月夜こう
日本の這入口からさくらさく
やよう赤い蕣を踏まいぞ
名月や打ちの面も天宗数
、うかと来て我をのかしの踏り
、大氣のくわりと蕣かしの
、どこもくも荒いかしいこうけう
、立かしこ三つ四つ五つ六つかしや
おそ起や蚊屋から呼る主慶
屋のあと吹て黄つてこうこうこう

横原製

屋のあと飛くるこうこうこう
狭くこうもいざ光明ひ鹿の孔明
孔雀い蚊柱ばかり曲こうぬぞ
△ちの蛍都の空ハきれこうへぞ
夕立や三文花もこうこうよく
来かいりて一分別の蛙こう
犬の子が追てこうて行也雪線
夕立の是切とばこうりこうこう
△行こう蛍都の夜もやかましき
蚊いぶしも歩こうきこうひこうこう
五十こうこう都の蚊にも咲いけり
△はわ蛍都の空ハきれこうへぞ

月ゝ[illegible]ぬ[illegible]多はちりくず
[illegible]の[illegible]所くかしこし
七部抄を浸し[illegible]して浸る[illegible]茅[illegible]止[illegible]
いかゞ[illegible]ら[illegible]に関し[illegible]句を田園に関係し[illegible]を
浸[illegible]きつけ[illegible]こんちゝ[illegible]
中に蒙て[illegible]の[illegible]一切略し[illegible]
[illegible]山子の句に[illegible]茅が自然
こ留[illegible]一茶の句[illegible]分しの句が多いが
[illegible]化人の言及し難いのもある。飯や瓢や[illegible]
とに就ても例のごとく田情を寄せ[illegible]みるのが多く[illegible]
つて著想平板である。[illegible]を借りて京都の庭中の
[illegible]しさや、空氣のよかゝることを云ふ[illegible]は七月

意を得れとのがある。ぬんで仮語を用ゐて句意
を強めることは一茶の特の技能で、うぶる[illegible]
流きに精神のあることを思へやる。一茶は[illegible]
自家の分又境界をさらけ出す一點[illegible]
[illegible]天真爛漫の味があつて[illegible]の[illegible]
かゞ[illegible]おもしろいが、俳[illegible]
[illegible]に強[illegible]あるが[illegible]
[illegible]る。自分の[illegible]
記。

○今の院性と我と数[illegible]を見[illegible]経渦四雄に[illegible]
みる。芳村や小中[illegible]高業の敲渦が[illegible]層の色[illegible]
[illegible]けんと[illegible]姑息の敲渦でい[illegible]肝腎の疾患を治療が[illegible]

かず、徒らに金融業者を利する結果となり畢ることは、此の
報紙に所見を陳べて置いたがどうしても非常の場合を除
くには非常の手段に據らねばならぬ、或ることには借金
棒引論を主張する、これは非常手段で（拙事）ないが、
一方に於ては今の世の中に普く行はれた徳政などが
行はるべきでないと云ふものもあるけれども、去りとて別に善
變への法ありとも覚へない。實は借金棒引論は今回除
的に問題となるものである。これが云はゆる徳政である、戦敗国
の独乙が負ふ所の負債は千三百二十億マルクで
利権独乙がこれを仕拂ふことが出来ないので、之れを
百五十八億に減じたのも亦徳政で、これがヤング案で
ある。それでも独乙に仕拂の力がないので過般のローザ
ンヌの賠償会議で更らに三十億マルクに引下げた。債権
國は之れに對する措置はまだ決しないが、独乙の此の莫大
の國債務が世界不景氣の癌であつて、此の債務を償
却もしめんとしても独乙にその能力がなく、唯だ空な債
権債務が世界の財界を悪化して居るは悪であると云ふ所
から、棒引の声も行はれ始めて居るが、恐らくは債権國のアメリカ
も自家の不景気匡救策からも之れに應ずるであらう。
斯の如く國際的に於ても既に借金棒引論が行はれて
ゐる。謂はゞこれも徳政で有る、我が此の窮状を済ふ
一策として考へると今時徳政の考を起すのも
謂はれるかも知れぬが、徳政は日本に於て上代から
いろいろの形式で行はれ、時の為政家が濫用して自家

の利福を図ることもあるべく、それが為の徳政とも
ふと美名を冠する者あれど、誰れも考へてみるのは、それ
を今頃持ち出して実施の方策を擬するなど、任治
の困難が極力なるものなることを思ひ到ると、容易に戦慄
を禁じ得ないものがある。係しいくら行詰つてもアワシ
ヨビでも行かんまの限り、徳政的の偽金棒引は蓋し実に
ハカつうしからう、可成斯るまた紛糾の事を生ぜざる任治
困難を免かるべく、第二出版界の真創造努力を要し、困難
寄りも[illegible]新紙の真創造努力を要し、困難
故迚、犠牲的精神を要するのは、そこまでもこう
まのことが最も慨すべきである。
の考へてみると日本経済のやり方の根拠の根本

横原制

るい、それは人口過剰困難なるかと云へば、任治の統制がなる
いからである、斯角農民が努力しても、肝腎な統
制が缺けて居るから、努力しても産をつとめん
バカめるほど演ぜず低義となる。米に於て然り
農生産に於ても然りである。米の値の低下は結局農
困もあるが、畜産輸入の値の廉なるものの圧迫地の値の廉な
る米をどしどし内地に輸入しても内地の米値の低義
するも亦農の事ひとつあるうと義務統制の必要が
ある。生産に於ても亦然りで、生糸の高騰を或る程度
まで制限しようとするが、値を保つことが出来ない、それ
を制限せんとすれば養蚕から制限しなけ
ればならぬ、それを放任しても生糸類を制限せん

とするのは無理の法則で、そこに統制が制限されてゐる。
公府多くの需用供給を一切攝ずず、無閑の産業を奬
勵し、唯だに之れ迫多に後れを取らぬ様一般の競
爭するけれども、実はこれも價を引下げて農家の
勞力を奪ふことゝなる所以であつて、こゝに統
制がきいの日本の農業は飽まで一方の偏重もいちゝ
ゝい但機にあるる。或る割合を保つて米作畑作養蚕
收穫を併用してこれを一の失ふものは他で補ふことゝ
もゝるのだが、一時の利益と趨つて養蚕生絲の
一方に趨る結果の生絲の價が下落すれば
立ちて饑餓に陥ることゝなる。長空なるかなの
実例で、農業種目の按配も統制が必要で

横原制

あるのに、そこまで之れを制して居る。農家の使用す
る肥料の額は仍ほとんど大きなものであり其の價の高下
は農家に大なる関係がある。然るにあくまでも肥
料があるべきもの、即つて騰貴することのあるのは、肥料
会社が暴利を貪るからである。また今日の場合
大資本家が長つて政府が牽制を難ずるの
みならず、肥料の輸出奬勵を表とそれその價を
高騰に任ずる。こんなことは大切な統制を制くるべ
あつて農家の副産物たる繭が高く價を持ち得ないのは
べて農家の副産物たるブロークーが農民の急を奇貨として安價
絞搾するブロークーが集めるからである。荒一北等副産物を個

個々に売ることも出来、但会社制度の下に一所に寄せ集めて直接需用する地に運送して販売することもバ、みじめな農民を救ふことも出来るのである。豚肉などの問屋が農家と都会地に居て個人取引の不利を受つゝある実例である。ぶりく但会を形くることが出来ない。西瓜などハ但会法及現在都会地に運搬さゝれ投売りの憂を免れても有るが、何分にも此外茶の方面も統制が無いから、とゝ謂ひ難いである。此外農村の人口統制とゝハ殖民問題と関聯をもつ、もとく日本の如き狭隘の農道の人間が過剰となるから失業者も生ずる。不景気とゝなると一旦都会地に出たるも失業の為め帰農する。

榛原製

ことゝなる。農村に養ふ国産は過剰の人間を他に吐き出す工夫がなければならん、人口統制が大切であるかこれハ勿論国家の重要の務であらねばならぬ。地方住民に関しても勿論統制が必要であるが、全体地方の負担ハ都会地に比べて重きを置くと注いて居る。農民を都会地に比べても重い税を課するとハ根本的に改め居べきである。ことに村の負担を別として居村を統制上から経費も節減し得るように考へる。学校の保合、産業組合の保合、重複する農業団体の保合、公務員の減員等々農村の復活を図る為めに農村の実状に関して任務を極力節約することも必要である。要す

るのは、日本の農村のみと個々区区の銃の勝手の事をやつ
て、その結果折角行び得たるものを[illegible]
んも農業組織が四囲一藝的であつて、一戸が一年中朝から
晩までいつてもんばすいやうなことが共同の物
神もなく、任務頭脳もなくの無理いきいが、将来流
きを行くのまへどうしても統制が無くてハ農民
民が勝手にしても行き立たぬことハ切切つてみる。

八月十日の記

帝国議会が開けてから和歌年和を保て居る。
農村いとんどが御今の恩賞を受けて居るも
うか、減ぜて来て出すと云ハパーセント農
民の為めであるから、農村の利益ハ此等に

複原制

者の強制さる振作さんるべき筈であるのを
の中奨もなく、今日の如くなりたるまむの行
き渡りの極と達したのは、果して誰の責任であ
ろうか、農民から見て此様さんと比較さ いつもの通
り手形を発行しても農民を欺いてみることハ何
人と云ふも実が極めてみる。折角振合
設けるも其恩賞を流さうとも云ハる
べハるいか、これを就ても政党のハ恩賞がある。
政党ハ互ひに其の勢力を農村で張りあつて
で、わしも実践を挙げるハ。いつの場合ひも浪費本
家の爪牙となり、農民を踏台にするのであるか
ら、農民ハ選挙のハ。第十回の選挙

東京實施記念

新東京八名勝投票募集

一、名勝候補地選定委員（イロハ順）

内務省都市計畫課長　飯沼一省氏
理學博士　脇水鐵五郎氏
農林總監　藤沼庄平氏
東京鐵道局長　新井堯爾氏
東京市公園課長　井下清氏
文學博士　鳥居龍藏氏
林學博士　田村剛氏
東京府知事　香坂昌康氏
理學博士　三好學氏
内務省衛生局長　大島辰次郎氏
東京市長　永田秀次郎氏
文部省宗教局保存課長　有光次郎氏
文部省宗教局長　下村壽一氏

一、名勝候補地

洗足池（大森區）
羽田の水郷（蒲田區）
瀬田玉川の丘（世田谷區）
哲學堂（中野區）
上井草の八幡（杉並區）
雜司ヶ谷の森（豐島區）
豐島園（板橋區）
飛鳥山（王子區）
綾瀬川（足立區）
向島百花園（向島區）
立石附近中川堤（葛飾區）
小松川橋の展望（江戸川區）
今井の蘆原（江戸川區）
北品川天王社（品川區）
目黑の祐天寺（目黑區）
池上本門寺（大森區）
世田谷豪德寺（世田谷區）
代々木の原（澁谷區）
新井藥師（中野區）
杉並區堀の内妙法寺
瀧野川の溪流（瀧野川區）
赤塚の松（板橋區）
豐島野新田の渡（王子區）
王子權現の臺（王子區）
荒川放水路（王子區）
日暮里諏訪神社（荒川區）
西新井大師（足立區）
龜戸天神（城東區）
堀切の菖蒲園（葛飾區）
柴又帝釋天（葛飾區）
篠崎堤の櫻（江戸川區）
大井の大佛（品川區）
目黑不動（目黑區）
丸子多摩川の丘（大森區）
奥澤の九品佛（世田谷區）
戸山ヶ原（澁谷區）
塔の山公園（中野區）
大宮八幡（杉並區）
三寶寺池（板橋區）
淀橋（中野區）
中野區（王子區）
赤羽（荒川區）
目黑（足立區）
目黑（葛飾區）
大森（江戸川區）
世田谷（葛飾區）
水元の水郷（葛飾區）
善養寺の松（江戸川區）

注意――明治聖宮は漏れ多きを以て特に候補地に擧げません。

大

一、名勝（イ）本年十月一日を以て大東京に編入せらるゝ新地域より名勝八ヶ所を投票により募集す。（ロ）名勝とは景勝の地をいひ、その内に、神社、佛閣、古蹟等をも含む。（ハ）個人の邸宅または非公開の場所を除く。

一、投票方法　左記選定委員により選定せられたる左記四十一ヶ所の候補地中より一人一ヶ所限り官製ハガキにて、本社企畫部「新東京名勝投票係」宛に投票すること。

一、投票期間　昭和七年八月十一日より同年九月十日までとす。但し投票に付ては、同九月十日午後十二時限りとす。

一、投票發表方法　投票數は逐日報知新聞紙上に掲載し、當選せる八名勝地は本年九月二十五日報知新聞紙上に發表す。

一、表彰方法　當選したる八名勝地には、記念碑を建立し永く其の名譽を表彰す。

榛原製

の今研の報知新聞に出づる東京に編入されたる地区の内より八勝を選ぶの広告が出ておる。東京の名勝とも云へべき自然の風景をもいこんで市ある区内にあるべき筈である。挙げられた四十数の候補地をみるに、大体人をしめるに足る美観ばかりである。この如く盛んにしかも東京にある名勝とすべきものの多きことは江戸時代の名勝と云はれやうのものは此の候補地の内いくつうえへて居るけれども、そん等の中まで選ぶの変遷で賞観に値いしるべい所は生じて来ることは又しても武蔵野さんたるべき所で却て自然の風致を認めて名勝とすべき所もある。兎角風景美観賞眼が苦しい事つくづく感ずる。

なるのだ、どんなものが取捨するか難きもつうまいが、等の高境に泥まず新しい鑑賞眼を以つて選ぶことは賛成である。兎もすると神社仏閣や古跡を重きを置き過ぎて、行かなければならぬもの何等風致もないやうなものを持ち上げることが、元来往々あることだが、いくら由緒のある神社仏閣も周囲の環境が賞観を傷する所ばかりなら名勝とする迄ならぬ。名高い者ほど俗塵が塵集するので俗化してゐる所が多く、手軽に高くない境内も酷繁を極めた所などは名勝とするまい考へるまである。兎角風致を本位とし行楽の人をして愉快を感じる所を挙げねば失敗であらう

勿論こんなことは其の地方の戦争が異紀るものと投票の数の如き様なこと、充分もるべきものと及ぶまでもあるから、主任者は相当の見識を以て[illegible]する。

八月十一日記

○各書店に著行する中等教科書に余の文を採録したものが可なりにある。大体採録の際は承諾を求める事が来るのが例となるべきであるが、無断で出してあるものもあらうの多くの場合は著者は不同意を云はるべき編者は必然承諾を得べきものとして既に組み終ってから承諾を求め来るのが例となるべきである。自分の場合は既刊の随筆から採って来る。或る一二の文は諸方の教科書に採用されたことがあるが、例へば「今」とこの頃の「松の風」「松の風」などがそれである。昨年から今年にかけて余の文の採用されたのは「小林如泥」「松の風」「今」「仁者の品格」「頼三樹三郎」「若の双紙」「詩人と追ひ出せ」「日記のつけ方」「遼陽遥望」「附」などである。自分が得意としてゐる文は却って閉却されてゐる。恐らく教科書の約束と違ふからであらう。随筆も時々雷と役立つことがあるが、若し自分が随筆に無くば、余の文などは絶対に教科書に採られないであらう。

の紙面の栗山子の幅を獲てから兎角栗山子と
無味ともうし、栗山子の句などを逸つくりしてゐる、

今朝の都新聞の栗山子の俳が出てゐたから取あ
へず、こゝに貼りつけた。栗山子ハ鳥をおどす道具
でそんハ人間らしくそんへ飛べるまぬ
鳥の恐れる武器
をもたれべおどし
がきかるいから矢
をつがえた弓を
持つてゐるのが通
例だが、何人とも
て も 新 鮮 だ から 兎
もまるもと鳥の俳り

颱風も無事にそれて（葛西にて）

を受けて、そこで二人それぞれの鳴子である。小さな板を
数本の竹切を結び、細び曳くとガラ〳〵と鳴ると
書いてある。鳥の最も驚くのは、穿う鳴子である、鳴子の
鳥の驚しは遠射砲である。農家の心る案山子は多
くは藁で作られた人形のようなもの、また仕へ古るしの笠を
とを冠ぶせる。何人の藝術も、古るしの物を
案山子こそ最も百姓の肖像の形の顔をつくり
で、鳥が百姓を知って怨ることなんば、あの山子は彩く
あらねばならぬと思はれる。古い百姓の風俗も追々
変遷し、●芭蕉笠の代りに洋帽を冠つり、股引の
代りにゲボンを穿つようするので、案山子の形態
も自然変化せざるを得ないこゝに収めた俗の帽を

榛原制

載いてゐる。或は甲冑を擬したものを日着せかりまることも
あるが、それが鳥をどう理解されるであらうか、戰
國時代ならば、鳥のことを、今の鳥は弓矢や甲冑よ
りも銃を擬したものを恐れるさせる方が利け目がある
かもしれぬ。あの案山子も時代と共に変化するはずで
が、動もすると、セルロイドの人形などを案山子に代用
する、玩具の廣告などを利用することなどして、
鳥の心理と自漸やく離れてあるやうに思はれる。要
その巡査がこれいまそうであるが、巡査を擬した案
山子を作ったとても鳥の威嚇の効があるのどう
か、あかし案山子は鳥を嚇かすに止まるが、ともすると
泥棒を嚇かすことも多くある、泥棒どころか、藁人形

自我慢を圓押しして、弱点を敵をしめた例もある。
人間のある階級の高山子の自然のこのあいくらも
あるのある詩人は金箔を塗つた佛も人間の高山子
の枝をこのみとこれが味のある言ひ。八月十三日記
○昨日のはある人の紹介で菊池重三郎と云ふ若い人が
訪ねて来た。主義ある出身で三年計り英国にゐた
ものし、今は単独で英文の教授をしてゐる
とかで、外国を歩いた事の思ひ出を書いた『欧羅巴
拾遺』一冊を贈られた。無邪の折柄早速読んで
見ると、書き方が上手でリックで無邪気な思ひ出
が多く、少しも自分を衒はず、完全な一篇の集で
も読んでゐるやうな気がして、ひきずられて其今

許も読みつつ以、大体外国の人の書いた紀行文
などは往切形で一種の忘味まで感ずるものだ、こんな(異)を異つて
[illegible]、みて、著者(洋行者の口癖)と全然脱して
みる所を興を感じた。その輝訳の二三を挙げて見る
と、(英文は長いから訳の部分を書く)

英国の動物園にチンパンジーをみると、いろ
の親家がやつて来た中に若い女も交つてゐて、その
女と偶然目と目が合つたのが、女はチンパンジーを
見ることをそつちのけにして、ぬる思もちで連
れのことのさルツケとこそして暗に自分をさしたのが、
自分は忘る心持なるそうも動物園を去れと

あるときハ、日本人がテンバージールに似てゐるとでも思つたのであらう。

ある時日本飯を喰つて残飯の仕末に困り、いつも街頭に蓋の集まるを悪く、態と残飯を持つて行つて バラ〳〵まき散すと、こんハしらず群雀い寄つて其匂ひを嗅ぐと、残飯の香をも嗅くやいなや一粒も口にしないのに失望した

とある、英京の雀ハ、起臥の残りの麦入り喰ふが米飯ハお新りと分つた

○昨今農村救済が切迫の問題となつてゐるのでこんな事も及ばずながらこうした策の一

[illegible]

人の著述などを読んでみるが、四年前に入つた小説
「土」と題するのが長篇第一番として、可なりの出
来栄であるので二日間ほど暇を惜んで読み耽
つた。ちょうど昨年の秋作田舎に住みこんでゐる自分等は、
百姓の貧乏生活や農村の荒しい事情などは深刻
まる決して難くない。此の小説は如何なる実情を
よく描いてゐる。田園に自らなつて生活した
つとめて無ければ出来ない。のみならず書けないと思ふ。
ゾラ貧困物語を描くものはブルジョアル描写付
くのが目的であつて、読んでゐても底に氣がさすが、
こんなは為めまる所があるとこまれも
農村の悩むべき状態が窺ひ知られる。都会などが手のしようがないから、小説が、実の涙をもつて慰める
小説で田舎の実情を想像し得るいとの
切めて思耐して。このの小説を後過せばならぬ
と思ふ。

八月十三日

日露のことを毎日の新聞で容易でない
コンナ時れ日米戦争の空想に馳せて時局をつぶ
すの一興とて、地図を繰して見る。地図を見る
と日米の距離の遠きこと、いのち数日かかるを得ずへ。
米国でいふ日本を敵として共同一戦をやらうと志す
い軍事征服をやつてみます、いつも軍備全滅うある
と日本の軍備を侮ることの全力を尽してなきまで、
ぬが為め日本は不利を蒙つてみますけれども、米国は

今日日本を攻撃しようとする優秀の軍備を有しまして
も、日本と戦ふことは決して容易であるまいと、況して
軍備のまだ充分でない今日に於ては、日本と戦ふことは
米国の不利で窮まる日本の利であります。或る人の申
すには米国の航空設備は非常のものと迚も日本は敵し
難いと云ふ事、そんな数に於て敵し難いことは事実
であります。其為数の飛行機を以て日本
を襲ふことは距離の関係から到底出来ません。
米国の飛行機が日本を襲撃する前に、米
国の海軍が先づ日本を襲撃する前に、
けんば、飛行機は利益日本の上空に来ることは出
来ません。米国を相手に何等の抵抗をすることは

横原製

出来ない所から遠征に出ることは
なるまいと思ます。米国の海軍は大西洋方面にもあり
ますから、其力を半分にしても
十万を超す程の太平洋側の艦隊に対抗することは
二ヶ月も掛かります。さてそれが太陸まで来り、それか
ら比律賓やグワムあたりまで来る時は日米戦争
始まると同時に日本は根拠を制することを
目的とするであらうから、米の海軍がここに来る
途中にある南の北緯二度の地点、就中比律賓を攻撃する
であらう。比律賓は九州の南約千二百海里の所にあ
りますから、米国艦隊が例へば真珠港を解纜す
ると同時に日本艦隊が佐世保或は横須賀を出発

まると、日本艦隊は約四の間比律賓に列着しますが
米国艦隊は約十三日間を要します。所ろ時日を要
のあることが米国の不利であると同じく日本の利益が
あるのに、米の艦隊が比律賓に列着するの前に、日本
は多分攻略を畢るであろう。勿論比律賓の相当
の防備があるとは。軍艦も多く、併
し軍艦は密式のものであるから陸兵を一度に乗
きるが。日本が之れを攻略するには陸兵を休めを防備の
ある地點を選んで上陸するの相違あるが、先方は元
行機のあることは勿論であるが、基隆から比律賓に
は二百海里を過きるの近距離にあるから、基隆
より元行機を送って陸兵を掩護し以て敵機を

榛原製

撃破することは勿論である。比律賓の防備は幸にも
難攻不落の如き堅固のものでなく、日本の力を
以てしたら、米艦の到着まで日章旗を掲ることは
決して困難でないであろう。グアムまでも之れは比
律賓よりも防備の無いものであるから、之れを攻
略することも容易であるが、米の主要なる策戦は
比律賓にあるから、日本が機先を制して先づ之れ
を取ることが敵の死命を制することになる。
こゝを占領して逆に米軍を撃つことは大勢
に於て米軍に負けとなります。比律賓は
日本と米国の大切な足溜りで、米国の軍隊家は北
比の防備に注意を払っておりますが、今日の宮殿は

此完全を保かす為米国が日本兵の上陸し得る所のあるのは日本を取つて此上ない仕合せであります。これを思ふとかの義全権がワシントン会議で防備制限を主張したのは大功ありと云はざるを得ない。比律賓の防備が難攻不落とまつてゐたら、列国日本に攻撃の出来るものは無つた。米の軍略家は防備撤去に就ては其成るべく速やかに撤去して大失策であつたと云ふ。殊に大きな根據地である。況しくが比律賓は米国の手に帰した。

こんなことが日本の手に帰したとすると、日本は真珠港に據ることは勿論のこと、蘭印の心臓部を衝くことも出来る。日本が比律賓を占領したとすると、米国は瓜哇にも

樣原製

八幡丸が瓜哇に日本を距ること三千四百海里隔てて居り、瓜哇と比律賓とは約四千八百海里あります。随分遠い根據地であります。米国は比律賓の奪還を企てるかも知れませんが恐らく不可能でありましよう。況や日本の陸軍が控つて居ますから防衛を固くすることは為すまいから、米国の陸軍を送く本国から輸送せねばならぬ。米国の陸軍が上陸人比律賓を奪還するとすれば、日本の陸七箇の陸兵を本国から連れて来ることとなる。之れを運ぶ船が約七八十艘も要るやうな譯で、実に容易なことではありませんから、行つても日本は此の利を占めて敵を充分疲らしめることが出来る位置に居ります

艦隊がもけんば日本艦隊に出動まし、日都合がてるけんば
潜んでおることが出来る、敵いまんな地の利を得るに
から始終苦しゐるけんばまん、まんが実際容易
なることでないの七八萬の陸兵を比律賓まで輸送
するとも夢を説くやうなものだが、まんの実力が
出来ることまると、米国艦隊の為め、為めの勢も容
易あるものでない。日本が実を出しても敵の艦隊を迎へ
ないから、手足まもひの多い大艦隊を迎へ
主の戦と出ることも或は一変かもしれまへ。
軍艦の比較いろいろと数と比べて米へ優勢とあ
るけれども、質と数とは決して優勢とまへ。来方と
比べて特に射程と比べて日本が優勢であることへ

彼等専門家のいふ如く、大体に於て日本の艦
隊はいろいろ都合が取れてゐる。公平な軍事批評家
は褒めてゐるが、米は度大ひであるから、艦隊や身の長
こと技術ともあるが四隻の各部分が平均してゐる
いそこの実験をみると、非常に不利益がある。
日本の軍艦の実力比較に於て一概に考へ難ひ
といふのは、弱国の武器と云はんとする。潜水艦の
操縦は日本の最も得意とする所ひ、米国の為め
怖ることなかるが、日本の廿三度三萬六千噸を
まるまる米国の八倍うま七度一万一千噸を
あるまるまる。いかこんも砲かる米国の弱点と
云の指べるべる。

日本が比律賓を手に入れることと、亦長く米國を制することとなる。日露戦争の為めに得た樺太は一番四千方哩と云はれるから、それは不毛の地で殆ど植民の為めにならないが、比律賓は十萬八千方哩もある南方豊饒の地で、樺太の約十倍もある。日本將来の植民地としても最も適当な地である。日米戦争のお蔭でこんが日本はこの辺さうとすれば、こんでいけばも略々報ひらるべやうなわけだ。

日米戦争を云ふのは、パナマ運河の国を注き逸早く運河を閉塞せんと、米國艦隊を大西洋側の艦隊を

複原製

合体させて北の運河なる国のことが最も捷径である。それでも二ヶ月を要すると云はれ、パナマ運河を通して得るものとすれば、ケープ、ホルンを迂回しなければならんことになるから、米國の経済的価値は非常に多大である。然らばパナマ運河は果して通過の出来ないやうにすることを考へると、逸早く日本の高艦が自爆することとを考へると、逸早く飛び来るかも知れないが、それなることは日露戦争に於ける米國の地の運河を北上するか、先来るか、何れにせよ、恐らく先行機で来たる機関銃の如き武器がして来るから、恐らく先行機で来たる爆撃すること無ければそれを云ひ出すべきが、それ以上はコスタリカの西岸キュ

しブラの港をもつて鉄、弾を根據地とするけれども、北港から、ハナて運河まで七百浬ある、北住る距離るる死行機も働くことが出来る筈で、運河の沿岸は不死身である。

といふ訳へないのである。

日米開戦となると米国を援ける国があるかどうか、支那は援ける可能性があるけれども、支那は征服することは三四の国を差し向けんで足りる、日米戦争は陸軍は支那を武を用ひる所がないから、支那を根本的に征伐するまで好機待ちである。露西亞はどうかと云へば、露西亞は米国と国交断絶の国である、もや起つて援ける意を為さぬであらう。あまり英国が助けるかもしれぬと云ふ感念がないでもないが、実は英国の恐る所は日印戦争と華命が起る危険があるから、日本に為して若し英米が連合してやつてくると云ふ心配がある。恐らく英国も安心出来ぬ。米も無論出来ぬであらう。

日本はいつも恐大論者がある、大国である太刀折が出来ない限り、支那のやうな国の如きは、日本に降服しないから、米露西亞の如きは、日本に降服しないから、米国の大なる金満家と、和平論者が強くなるまでは、主力の文明戦争が強くなるまでは。主力戦争が長くつづくと

日本ハ金融ニ困ると云ふ懸念を抱くものもあるが、日米戦争ハ敵を迎へての戦争であつても、亜米利加こそ長距大艦隊を率へて異域ニ来るのであるから、金ハ莫大ニ要るであらう。日本ハ祖国若くハ其の附近に居るのだから、経済ハ国内の論で済む。全体米国ハ何うも賃銀でも、士官兵卒の給料でも頗る高いのであるし、生活法も紳士的であるから、大軍を出せば日本を攻めるとなれば、恐らく莫大の資を要するであらう。現ニ世界の大戦ニ就て見るも、独乙ハ四ケ年間で六百六十億を費したそうであるが、米国ハ僅かニ廿一ケ月参戦した丈で四百六十億を費して居る。實ニ豪勢のものだが、遠方ハ大軍を動かす

経費ハ莫大なものである。日米戦争ハどんなを費すかハ際限の限りないが、日本ハ先づ只然で敵を迎へ撃つのであるから、経済的に戦ひ得ることも仕合せの一つと数へてよろしいのである。

日米戦争が豫約されて小説などに擬せられいろく書かれたものがあるが、外国の著述家が書いたものもあるといふが、世界の識者ハ日本の侮り難いことを異口同音ニ云ふて居るのであるらしいが、米人ハ日本の海軍の状勢をよく知つて居ることゝて、日米戦争を本国の為め危んで居る位である。古来大軍を長距離ニ進めて勝つた例ハ多くと無い。殊ニ日本ハ天険の地勢を占め、新式の戦術ハ他にある備

国をも畏服して居るのに比べて、米国をのみ決して怖るる迄ならぬ。

日露戦争の時、動員する利害関係の深かるべき米国が、沿海州を抜きして大西洋からの軍艦までも集まるものもあるのも、一時のことと思つたらしく、抵抗もみとおく支持態度をあらはす。或は満洲事件の為に絶交を決んじて迄、ロシヤ戦争の為に満洲問題が解決するまいとも思はれた。満洲問題も聯合を解消して結局横平を押切られた日本は聯合を脱退したも日本の権益を擁護しようけんばくをもつて断行する岐路に最早日露の間にあるからく、日本相戦ふ日も敢て遠きにあらずと覚悟せねばならぬ。

○時雨茶の雪堤筆化の画冊五本を購ふ。風景人物花鳥さまざまのものを画いたものもあり。

○雪堤の画は特色あるものあり、つれづれの業務の娯具とするもの多し。雪堤の画は特色流れを尾ひ筆致一般に数するものあり。北人尾張に行くとの消息十年を経ず、浦布玉川国に錦絵を世に行はる。名は宗一、梅和杉斎等の弟子なり。

北冊子各巻の尾と二顆の印あり。

最後の巻尾に後歌あり、雪堤の父の経歴作とて記す。

去る月雪堤名字秀、嵯峨南一陽庵

八月十二日

等の雅号家世々以書画業とす。雪舟
風に倣ひ雪旦丸も勝れり。法橋に叙す、江
都名所図会に曰く、即ち其画くや也 天保十
四年正月歿す年七十六

○市街の上空を風船球を宣伝用の字をあらはし
保が解かれ見へるのは誰れも知てゐるものであるが
元行機の通る通を防止する為め用ゆる阻塞氣
球とは、まも形こと異なり、四角いやうなもの
である。こんな夜写こ眼を用ゐるまでもなく、都
市の重要地点を掩護する二三百米突
を隔て、揚げる、敵飛行機が来襲の際
その繋留索

こ衝突すれば爆発する。敵は約四百米の
高昇ることが出来る。陸上要塞を防
ぐことが出来る。世界の大戦では伊軍が此方
法を用ゐた。

○毒瓦斯を都市に投ずるは人道に背くとして
一八九九年のヘーグ條約で之れが使用を禁じたけ
れども世界大戦に於ては独乙が先づ禁を破る
国も亦敢つた。そこで一九一九年のヴェルサイユの平
和條約に之れを禁じ、次で一九二二年ワシントン会
議に於ても之れを禁じ日本も四名の一人である
けれども、こんが表面の表面の理由は約束

り行はんとうもろく各国共に毒瓦斯を用ゐる筈にて研究したるの、そして化学の者方面から云はせると、軍備和協会議と迄なを禁じたのは全くの空論で、なつ家も何も聴かないのうで、一概に科学の応用を殺酷だと思ひこんで仕舞ふから来たものであらう。瓦斯はいくらでもつかはれるのもつてゐる兵器の中でも最も有効で且つ人道的である、何人とてもこれを拒る理由はない。

右は全中毒者の僅かに二パーセントに過ぎぬ。況んや瓦斯の本体は経済的のものであるから、瓦斯戦の寧ろ大切である。兎に角いくら禁じても実際は人こまらせれば行はるべきであらう、都合悪ければ化学的兵器問題のいやうな

せるの為も重宝のものである。

○光行機を射落するのは高射砲があるから、これが性質味方の攻撃を往つてゐる光行機を撃つことがあり、亦味方の光行機が高射砲射撃の為め能率の働きを妨げられることがあつて往々問題を生ずる。現実例は英国と在つても英国に於ても高射砲と味方の光行機を隔離したことがある。偵行社の紀事を見ると

光行機戦闘地帯と高射砲射撃地帯とは防禦の重要なる地帯である。大戦中の独逸の場合は時に、北境防禦の重点の観点にあり、大戦中の独逸の場合は又防禦の観点にあり、ロンドン防禦に於ても、北部防禦に於ても、実に暴

霞し御立ひれ自己の戦闘の為に他地帯の法
動を後却する傾向あり。室中戦闘の油が
無のたくさん、地上部隊さんが顧慮し抜き
目的との防空戦闘機側の云ひ分であって、敵
機を墜落セーもるなんん、友軍の戦闘機
が邪魔にうって困ることい方射砲隊側の言ひ
ぶりである。斯く打撃あるの為の通命と
砲のなんん防空戦闘機が墜落の運命と
違ふ理由が笑ひ出る。なぜ防空兵の
隊の意志と離き立てる。方射砲隊は自業
自得であるといひ、果しかつかず為に次きの如
き規定が新に生れた。

標原制

但全体中戦闘が有利に展開つゝあるも
地帯を通過する敵機に対しこれを射砲の射
撃に譲るべきを原則とす
大戦後布の規定
戦闘中の戦闘機も地上射撃待ての位置
あるべき場合に於ては方射砲は一時射撃を
中止するものとす
と変した戦闘機を主体としたのであるが大体
に於いては地帯に分離して戦闘すること
が有利であると判断した。
○前に記した米国の根據地の（ルソン、グワムはのを回り
合へせて）一九一九（〇大正八年）の四月末和合して決定し

北日本の委任統治は帰属されれば列島から五日捲かれるやうなものだ。即ち北は小笠原及びマリアナを以つて、南西はパラウ及びヤップを以つて、南はカロリン東南はマーシャルを以つて圍まれることゝなつた。北はジャップ時代不毛の地であるが軍略上西太平洋の咽喉を扼するグアムは新しい大なる脅威を與へる事である。之を日本の委任統治と帰すること米國の海軍力及び戦略が種々折衝の後矢張委任統治の型かれることもグアムを攻略する場合に大なる便利を日本に與へることを忘れてはならぬ。

○満州事件につき時の忠味を示す米国人の考へ

又ると宿命的の根本から来て居ることも亦たくさんのことである。

日露の全権がポーツマースに会合した時、例の満洲の利を得んと企てたところのハリマンはあの米人であつた。ハリマンは鐵道王とも云はれた人であり、彼人は日露戦争中米國が度々援助した代償として分前にあつからうと考へた。そこで日本に帰すべき南満鐵道を共同経営の名の下に自分の手に収め、東清鐵道を奪はし、シベリヤ鐵道の運輸権を得、自分の経営する太平洋汽船会社と連絡して米国沿岸と支那の下に世界を一周するの大計画をたてた。そこで当時の首相桂に説きつけ、桂もうつかり

榛原製

交ぜまぜ交作したが、或る日ある村が帰って来たを
丸を打破って仕舞った。若しハリマンの策が成功したと
したら満洲及び日本のみならず無つたのである。コンナ
事が米国の極東政策と、俄へてハリマンが死
んだからも、続継者を引続かんと、爾後二十年間
米国が日本を嫉視する種を蒔いたことを思ふ
と、満洲事件がキワカケをなして日米戦争
が起こるべき宿命であることを誰でもうなづく
を相違ない。

日米間の戦争に関心して毎日種々の新刊書を読ん
で居ると、此の問題に関し、既に生まれた種々
論のべきものがいくらかある。それは日本を褒めれば

標原製

「北」と説くものもある。問題の熱が生ずると種々の言葉
が沸き出で、中まで迄知と思ふものもある。
日露戦争の先月末から七月末迄廿数日の暑熱の結しやう
もなく、水い日中を送りやうもなく、コンナ時分に新聞
生徒の手まとへ時局と関する新刊書を読んで
見ると思ひ出す、いろいろのものを読んだ中の
中の政重政次を論じたものもあり、此頃代表的(代表的)
アシズム、日米戦争問題、秀村問題、脳髄脱(脱退)
退論、日本防衛論、等々の新刊書は
十数部に上つた。その中の尤も面白を用て読んだ
は日米戦争論で、池崎忠孝の「米国怖るるに足らず」が最も面白く書かれて居た。脳髄脱退論は

岸井寿郎の言いたいのが好奇心満々、学ぶ事
、まるでみれば米の陸軍少佐ジェファソン、デヴィスの
日本怖るべし」と驚きまるしものも又これが、若干まるで不
がありたが、不拘度々日本の発行機の威力を説き
米国の為替を説いてみる不こ何ともとても度無味の
ろうい威ばりしたが。若村教授論のもいろく後んび
又これがどうもとても強うこ要領を得て居らぬ、フ
アレヨを日本こそ用まる方法のみ就てはどんな有
があるか、理論を説いたことのいくつもあるが、日本人
適用して行のうやうな研究したものはいまだお目に
かからぬ。日本の防空をどうする」と言本専門的の
著述をみる可ろう数はるもがあつた。兎角後過しなよ

の多数は浅薄な失してもみれが二十四歳の海軍
は無責任ろうつれ、商は日本人の海軍をつけ心
業で国家の国防 ○現下の世相をみる 八月十七日
相は何くも珍ののようであるか、手等をしても文化の逆勢
を思はしめるものがある。今時公を私ろうも借金棒引論
を主張するものがあるでは、定利化や新定時代の
こと徳政ろうこと、えんきことがあつたが、今の世の市
民の経済の発現ろうは特殊性もせざろう、海世の業として
説くろうあるのは一言で無ろうか、政党の不評判は今
は極端に達した。みる政党者自身も之んを認めて
往々口にするのも言葉ではろうか。三百代議士の絶多

数を排する政党が自から組織出来ず、政党外の人を首班として其範囲の素的動せざるべからざる窮境に陥るべきなり。されど絶対多数を擁する体面上時の出来ない相談を政府に持出したれば、政府に屈服する。これが所謂政党根性である。政府は何人と雖も敢て其性質を破壊せんとするものなり。農民救済に就ては十四億の金を散ずるも農民救済に適せず、これは一種の恫喝ひあるが、行はれざるいこと、いなんも推るが、農民に媚びつつある政党根性がある所、なれども決して忘れざる政党根性がある所、くまで大膳の支出を主張するならば、何故にこれを放棄して農民を泣かせるのか、手薄い其の心事も

榛原製

極まれりとなす。同じく党員の責任の変動を許さんとすること言はまもなく。農民に媚びることが政党の地盤を保つに大切であるとの魂胆を暴露さらけ出したものなり。政党の信を置くに足らざることは、これを依つても解るべしなり。政府が失業救済のために府県と土木事業を起すことなどは、地方は皆喜ぶべきことなれども、田舎の私は真に弥兎と思ひ、なほ弥兎の現象なり。これへ事業費の義割かを其の府県に押付けるとは、なんぞ弥兎の力のないことなるべし。今はそんな弥兎を蒙る理由はなく、失業者を減ずる一策として学校の入学数を半減する

とする殖産も公的計畫されたるが、人家を半減する結果学校は経営難に陥るからと云ふて相當の補助を仕ふことを法令の校を造くんとすると少へ[illegible]益々北業の殖産のみ敬かさるを得ない。[illegible]これが時流初年頃の施措ひかるべく、現下の教育業にかならきんこくる。地方の教育費を四庫支離とすることい[illegible]を得ず[illegible]が、こん[illegible]ハ孤ハたん教育の[illegible]料を何の[illegible]も拙い得ないまで[illegible]窮[illegible]を[illegible]移[illegible]を思ひ立つるのどハ何ゝる失態であるか。時殺かたきうる合てられた政治一之つとの一刻もあ息を得ずへこの[illegible]の[illegible]徒の[illegible]末の亂脈を繰り返すびハ[illegible]紀未

んハ逆特又逆特、退化又退化で宋外人をして日本が素[illegible]を向ひ[illegible]を思ハ一方。但北部の人言を絶うせしめた一事の[illegible]世界のオリムピックで日本が五中[illegible]我の劉特を握り、亜米利加人の言葉を拙いたこと北、日米戦争の起りそうな矢先きに[illegible]の[illegible]八[illegible]等又ボーリの興味を[illegible]状の亂[illegible]を得ない。牧将馬占山の死後[illegible]遺産二十萬弗を散し[illegible]湯海洪の役害民を敢へんとまるるも今ハのことして附[illegible]

けかくてようと思ハの。

○閑る来じても古人の句を時ふ[illegible]アテハメテ見る前冊[illegible]し戦んを試みるに、言湯さるる

八廻つゝ行所まる 寛
命八十年の八九 一茶仕也

○上田秋成の雨月物語の中に支那小説を和訳し
なる事あり、その序ハ誠と思ハせぬほど巧みに
うれとうるおの
銀河影きえぬれば、氷輪我のみと照るを淋し
きに、新守る犬の吼る彦まもわれを滄波の

榛原製

音もなくしもとれなくやうなる、月の光も山
の陰に陰くらんが、今ハとを戸を閉て入んと
するに、なほ消ぬる おぼろなる星陰の中に人
あるに風の隠さ来るをあやしと又んば素穴
宗石事人うう
東海道名所の内
砌倚門如醉如癡 風吹草木之聲、莫
是花未、皆自驚疑 看見銀河秋之玉
宇澄澄、漸至三更時分、月光都沒了、隱見
星影中一人隨風而至、砌見之乃巨卿也
而生他日
ちゝなる者の物、家図に絵ることなれ、交の

軒端の人と絶ぶるあり、楊柳茂りやすくとも、
秋の初風の吹に耐めや、軒端の人は交りやす
くして赤遠ざかり、楊柳いくたび去と深めるる
軒端の人は絶て訪ふ日なし

原撥、云く

種樹莫種垂楊枝、徒交莫徒軒端兒
楊枝不耐秋風吹、軒端易徒音易離
君不見昨日書来面如懐、今日折来面如
塊、不如楊枝花可久、一度春風一回首

○日本人は佛教感化で梵鐘の響を聞くと何となく哀れを感ずる、新古今集に載せる「山寺の春の

の夫是で、それ程上れ麻寥の感を[illegible]典へたる等をも云ふ可きを云ふ幽を味はしめ、これも必定を等の血を佛教感化が流れもあるからのことであらう。

○京都の便利堂から複製本浮世理「磨」を宮のもてきた。元は井原西鶴の著と云のもあるが、頗る稀れな本だ。これまで丸本を見た人は寡と無いの比位である。去年也物二る年化粧の際に百方捜索した結果、朝日新聞の内海氏が故紙屑問屋の義父中から捜し得た処のハ大の巻見て、此度人間四巻ミに丸本が出た。今度利生の祝ぎる本を見る、巻首の上頭に「祝賀」の為

横原製

記が押しもあるも、当家未詳
右此本者伝小子之愈祝附秘蔵喜之郎自
遂校合令開版者也

二条通寺町西へ入所　加賀屋○
山本九兵衛刊

とあるも、浄瑠璃の文句の末に尾まい
貞享二乙丑歳正月吉日　とある、但
西鶴の名の見へるいのは北陸の九本の習慣であ
る。何故こんを西鶴の心とすること、筆法の
かゝをこんを誤解するのは、此物とは全く異つてゐる。
「暦」と明る話をつけた浄は天和四年二月頃

享と改元す、同十月廿九の後未慣用の暦を
改め、新に貞享暦を頒布したことを常とこゝ
特筆天皇の儀風暦採用に拒し越向を設け
たのである。通常五年とすると、師の連絡も不十
分であるが、当時の師匠なる一郎の公言があつたから、
師の不徹底をとがめず、この問題である保し流れた
西鶴は、あるも、市士十二月廿朝顔姫道うか
といい名文である。古めかしい舞踊からこんを浮つと話業
ようとしたとこの作品である　八月十九の記

○炎暑鎖すを術なく俳窟にて女人の句集を
繙んで涼を求む、時節柄先づ心を惹くは第十
の句なり

一夜二夜餃屋めつらしきにはひかな

其村の七部集なる江戸春武の句なり、初めて餃
屋に入りし心地説き得てあを見ん餃やさカビ

くさいにほひハあんど見ん餃やさ特徴の香なれ
しとそこのさあとます但し二三枚ならば横ちょん赤氣
を見へず

ちら日暮し油しめ木の呼音

こんもり七部集なる英四の句なり油しめ木の形
ねど鈍重のさまをそんな重くるしい掛聲が
かつて一層日暮し氣を涼感せしむ

ひわくと壁をふまんと書棄てる

こんい其蕉の句なり、室内迅して釜中の花る
めし、唯だ壁をうつ冷氣あり、鶯足を壁に托し
て涼をとるハ、事実あることなれど句を見るへ
ばあるも也

石の音や夏草あく露暑し

芭蕉の殺生石を詠まる有名な句也毒石を
説き得て妙を極む、彼人と共も之れを尊驚する
の句い出来まじい　暑熱逃しの技最も力あり

牛部屋に仮のあるじ、北句荒し　蚊の聞き残暑こゝ
ろ　芭蕉の句ろう、北句荒し蚊の聞き」の字無
れば平凡を免れず、流石に詩人ろう北詩的の
なを藉り来りて言外の妙を尽す

とぶ螢アレといはんも獨りごと

こんい大徒の閑寂の句ろう、螢を藉り来りて
物を言外の妙ろうんでも、女流の句らしく、何とな
く弱い感がある

暑後に物いらぬいろ〳〵の秋句を過ぐ、芭蕉の句
温雅ろうが多けれど中々性を欲宗の句あり、冬
れも美を愛す

月いづこ鐘は沈みて海の底　燈山

義仲の寿命の山か月悲し　追善

馬ろ疲て殘夢月遠し　秋の風

塚もうごけ我泣こゑの秋の風　追善

見えりのうしろや寂し秋の風　追善

鶏頭吹て蕎麦の秋欲するい淋が子を　憶老杜

教刑を寛しと侍りの句さま〳〵あんど左て二三
を拾ち

怠らぬあゆみ恐ろしかたつむり　太祇

あるく元心い持ひめかいつ哉　見道

枝ろくて世にかいはゝめ蓋ふ　芭蕉

澁柿や街道中し枝を垂れ　徐梦

夫向澁柿が枝を保つ所以はその實人と素いめるいうらりしとあの風刺を寓す、一茶の句又似り

余い左のぬき句をよろこぶ

花に酒汗しも牛のいくいこうふ　夢大

更る夜や世とそもろ　むしの影　利右

淺黄の雲やまぶ見め海のなりかしき　舞閑

白魚に石にさはらば消ぬべし　芭蕉

命士の風や扇に載て江戸みやげ

榛原製

夢の皆注きしまあそや餘のめらい

錦清て花の長い樓多ル　ロ

塩鮭の歯くきも寒し　ロ

稽の夢の腸凍る夜やうみ　ロ

岌ざまの夜こがしけり花椿　ロ

○九月號文藝春秋前原一城のる元も、播磨著者い前原と四人ろ前原一家をもつる著者の母の侍く化粧寅と云へば、寅ろ、余い前原こ緣故ありもの、その家のことも面ろ面ろきことなり、何うの表ましもらんと、笑ろ和めて

前原一誠のこと

楢崎　勤

私は明治維新前後の歴史については、學校の教科書で習つた以外に詳しくは知らない。だから萩の亂をおこした前原一誠のことも、私が萩のものではあるけれども、教科書以外については知らない。しかし、私の母は子供の頃、すぐ近くの前原一誠の母堂や、一誠夫人のゐられた家へよく遊びにいつたといふことなので、私は母からすこしばかり前原一誠についての挿話をきいてゐる。私は母からきいた、前原家の話を書かうと思ふが、母が一誠母堂や一誠夫人にきいた話にも、もう四十年も昔のことであるし、記憶のあやまりもあることであらう。その點はあらかじめお含み願ひたい。

前原一誠の母堂は小柄で、きりつとした剪りさげにしてゐた美しいひとであつた。もう年は七十くらゐであつたといふ一誠の母はやさしい、いゝひとだつたが、またなか〳〵きかん氣の性格のひとでもあつたさうである。

前原一誠の家は貧しい士族で、萩の上野といふ百姓村で一誠は育つた。家の貧しい一誠は、少年時代に米を搗いたりした。弟妹の守りをしたりした。夜になると、乳が足りなくて泣いてゐる弟や妹たちのために、一誠は百姓家を歩きまはつて乳をもらつたこともある。

一誠がまだ子供の頃のことである。ある日のこと、父親に伴はれて、一誠は弟と一緒に萩の町を流れてゐる阿武川に投網を打ちに出かける。一誠の役目は櫓をこぐことだつた。ところが、一誠はうまく櫓が押せない。それで、父親から幾度か櫓をうまく押すやうにと叱られた。一誠の父親は癇の強いひとである。たうとう一誠の父親は「櫓のひとつもろくにおせないやうな奴は駄目だ」と怒つて、いきなり舟の上から、廣く深い阿武川の眞ん中に一誠を突落してしまつた。そしてそのまゝ一誠を放つておいて家に歸つて來た。一誠はおそくなつても、いくらたつても歸つて來ない。家のものが、何うしたのだらうと心配して訊ねると、「一誠は阿武川に突落して來たよ」と、一誠の父親はさう云つて、すましてゐたといふことである。堪つたものではない。

かういふ兩親をもち、貧乏の中で前原一誠は成長した。

前原一誠は大きな男で、ひどいあばた面の醜男であつたさうである。そのあばた面のことでかういふことがある。一誠は、そのあばた面の醜さを何うかする方法はないかと云ふ相談の手紙を、井上文南（ママ）と云ふお醫者さんに出した。その手紙が私の家にあつたさうだが、いまは散佚して、私の家にはない。私はさういふ面白い前原一誠の手紙を失つたことを、ちよつと惜しい氣がしてゐる。

前原一誠夫人は、あやぐりといふ名のひとで、顔のあか白い、さう美しいひとではなかつた。私の母の知つてゐる頃の一誠夫人は五十一二の年配で、矢張り剪りさげの髪をしてゐる。

一誠と一誠夫人との間には子供が一人もなかつた。それで、一誠の弟の子供で昌一といふひとを貰つて育てゝゐた。私の母の記憶では、その昌一といふひとが、何か惡戯でもしたのか、云ふことでもきかなつたのか、一誠の母堂の手で、裏の庭の松の木に縛りつけられて泣いてゐたことがあつたさうだ。

前原一誠は、京都の女を萩につれて來てゐた。多分、その女は一誠の妾であつたらうと思はれる。あばた面の醜男だつたといふ一誠が、京都の美しい女を連れて來たといふことは、ちよつと興味を覺えさせられる。その女のひとは、一誠がなくなると暇をとつて京都に歸つて行つた。

所謂、前原一誠の亂――萩の亂――が起きた時、萩の菊ケ濱に官軍の軍艦が來航して、大砲を打つたさうだ。そして、一誠を捕へるために、官軍の一隊が一誠の家を捜索しようとした時に、一誠の母と、一誠夫人はかたくその家宅侵入を拒否した。

その時、既に一誠は官軍の手に捕へられてゐた。一誠の母、夫人たちが云つた。「一誠は逃げも隱れもしてゐない。既に捕へられてゐるから、この家を捜すのは無駄だ」そして、たうとう家の中に官軍の一隊の侵入を絶對に許さなかつたさうである。また、一誠が一歩も家に官軍をいれてはならないと命じておいたさうでもある。

一誠の母、そして一誠夫人は萩の土原の江古といふところに、立派な玄關のある七間くらゐある家に住んでゐた。庭には萩の名物の夏橙が植ゑられてゐて、一誠の母も夫人も、橙のために平常は草取りをしてゐたさうだ。藏には澤山の書物があつて、一ケ月もかゝつて書物の蟲干がされたさうである。

○航空母艦い今既ゝ各四ゝ出ゝ来ゝたゝ他日い必ゝ中母艦が工風とんるであらうと考へるの自分の迂闊ぶ既ゝ米四ゝ於ていい必ゝ考へるべきことが出来ておることを知つて一驚を喫した。ゝ又ゝい元行艦ゝ元行機を吊してゐるのがあり、亦氣裏中ゝ格納庫があ

つてその中に飛行機が五六基納めてあるのもあるこんど親と陸軍少佐北島定夫の飛行演流した様に習つてみる

飛行船の氣嚢に飛行機を吊りておいて、飛行中にこれを離船させるといふ試みを数年前から、アメリカで繰返えされてゐた。ところが、アメリカが世界に誇る大飛行船アクロン號が完成するとともに、その尾大な氣嚢の内部に格納庫を設け、主台の戦闘機を搭載することに成功したのである。

これの航續力の少い飛行機の短所を補

榛原製

あるとともに、攻防ともに力の弱い飛行船の短所をも補ふことゝなつて、飛行機と飛行船との理想的の相互扶助が実現したわけである。アクロン號が後二年に晩しに、アメリカは現ーコン號が更に大きいソ

表以上に有力な空の航空母艦を又一隻持つことになるのである。

○納涼散歩と名をつけて毎日の散歩に納涼の趣向を凝らす。地底を出まする一案と、日本橋から淺草まで地下鉄道の電車に乗る、流れに地底に涼氣漲り、究竟から鶯山まの坑道氣百尺下つた時の思をする。志かし此の涼氣の人

体まで可ろ〳〵ぬゝ不快の感あり、ある時のお茶の
水駅ゟ乗換の電車に乗
る、高架の高さまで開けた
る、高架の高さまで開けた
ゝ格別の涼味あるものに
なる、唯此北の一線学生
のみ試みに乗つて見た。見おろす仙台堀の茶渡
い電車の道と狭められ
た上、塔塔ゟ殺風
景なるのみ、曾つて乗りし風流風味なき
全く異なれり。ある日い五銭の高橋ゟ立銭の
蒸汽に乗り永代まで河を下つて見た。高橋
ゟ乗り住まひい毎ゟ行くが、墨水を下ることい実
に久後初めてある。時の満潮に際し風もやゝ烈し
く、殊ゟ元気を揚く、きあし墨江の形勢ハな

横原制

ゝ〳〵雄大であつて、帝都不朽の名所である
ことを感じさせた。殊ゟ大震災後多くの橋
梁が復興し、その種々の様式を鑑味する
のも一興であつた。渡河河岸を通る時ゟ
の公園内ゟ「ゴシック」形の塔形のふさゝ遠目楽
拝が見える、いいもと細川家の屋敷で昔ゟ
ハこゝゟ日本橋のかあつたことを思ひ出
すゞシク形の塔まで日本橋の高橋の
ようである。永代橋附近ゟ上陸して東
京湾の入口の防波堤を遠望す、風強く
「河岸」に入しく行立を許さず、食堂自動車
に乗つたが、納涼散策に成功したと云く得る

此の星丸の舟のうへにあつた。　八月二十二日記

納涼の方便として、飛行機を乗つて旅つて来る

ことにあらうが、その機会も来ること、唯だ

しるしるあきらめて、飛行機の研究に就てのいろ〳〵の書物を

読んで、世界の絵図と飛行機の比較などをしてみると、

日本が飛行機の方で遅れてゐるのは、実に開戦

の日を思ひやると、心臓を握かれるやうなのが

あつて、納涼どころの騒ぎでない。

○先づ桑山子のことを記んで書いたが、兎角桑

山子が頭脳のどこかに引っ掛つてゐるが、飛行の古物

と淡ちつけても、中々桑山子はきいかない。

きいかないことは、コンなことは空想でも

あらうけれども、敢て戦いはすして敵機を威嚇

するものがあれば、有かろう。桑山子とする

べきであらう。此生の日の録に、阻塞機といふ狡

猾室中に飛翔、敵機を遮り、その繋索に機

が触れると墜落するといふが、えらい中の

桑山子と云ることが出来よう。満洲世界の絵

図と飛行機と研究されて、みると少く無人飛行機

といふは、搭乗者がなく、電力熱心用で自動す

るものとなるが、こんが果して実用に供せられる

で研究のつもりとは、絵ちと遠い将来でもいうも

んでいかこんなるとは今でも或る程度人の操縦を

○前に掲しし竹田の置火燈の歌を山陽が酒席にて掲しし扇面余之れを表す、こんへ

標原製

那古に泊し時花ある毫も伯の筆也此年輪しし四余の手に帰す、又字数巻の
数もあり、すべてを後思し得さりしが此度刊本を此歌軸とあるを見て異照する山
陽の扇面を書いの此のと異なるを見て云々」の前
こたの句あり、他は全く同じ、亦刻本を俗り全部
後古ことを得て、脱しし句は左のみし

この世はあとの仮まくら、むすぶの夢
柳の葉に、ぬつゆ、そする洗ひ洗ひ

余刻本を摸り自から一紙を写し、之れを扇
面に添へて後古人の仏に供すと云ふ　八月廿三日

□過の京都の仮初宿として井原西鶴の浄瑠璃本「暫」を移出して宮のたもきにが、やはり北の浄瑠璃本を挿絵のあるのが多いそうだ、その挿絵は西鶴の自筆かどうか知らないが、絵入の方を複製して出したのは稀也複製朱色刷も上版して北斎名集と云ふは、畫も文字も西鶴自筆と云ふので珍書とうたはれて得て難しとも云ふべし、絵こそ有名なれ北斎の才能があつたことは、西鶴が西鶴に於てもあつたことがわかる、天和二年戊申月大淀吉水深江屋太郎兵衛の板で梅花風里の序がある。句は京坂の人の此かるく名高い人々北村季吟、畳花

藤原製

坊行脚、大定三年風、杖屋桃青、池西言水、元禄七年の跋、最後は西鶴の句が載せてある。西鶴自筆の絵入の句集は、きっと二三出るやうだが、自分の見るのは、これが始めである。

八月廿五日記

○数年中丸ビんの書庫と三宝寺の時分に就ての好事がきいと投しれが又市ゑい氏、春陽堂の廉價版文庫数百冊を捨して、中に森鷗外の北條霞亭が出て居て、賜ものを頂くのつた。霞亭は紀州の藩士で儒者である。細流宝で四方頁ニ亡人とする。もと駿府の人伊藤蘭軒を傳した。あとも執筆した。蘭軒は晩年の作である。蘭軒の伝記は長き年月の長きを要日りてあつた。遠載さ

北條霞亭が養蚕山の話と伝りあ三年養蚕を盛昔し比ことがよくかれて居る事実である。が彩の若き伝つて霞亭が養山と称重かれて遂と拡傳人を以つて擬され。この話をの人を以して持ち

のけられたことを初めて知ると得た。霧亭の家初
茶山を慕ふものの人と成して嵯峨樵歌（こんは霧
亭が嵯峨に住した時の集である）の序を茶山に
需めたので茶山は平素（原文は「平素」）厚しのれ丘の上で其後禮を
うち初めて茶山の（横書傍点）陽村会を訪ふ此時と偶と頼春
水也と在つて其人との交りもこんなと初まつた
のである。其後茶山は廉塾で霧亭を聘し
たき由を霧亭の友人山口凹巷（中略）つたの
で、霧亭も心動き西郷屋と共に謀つ
た所が西郷屋可とせず（中略）と廉塾に行くことを
ようなく自論こんは頼春水の扇を携へて廉塾を
去つた天保年間の後ひである。霧亭は茶山と霧

榛原製

亭とをんて、ある時川甚の伜春子文と親し茶山
を自分も亦と扶侯あるもの、北條北熟を紹
介するとあがるのでこの困るが、北條は北家を継
くの意はあるまいか、投つてくんと頼まれた。茶
山の意は其の姪を南る北家の女を配偶とせん
とする在つた、霧亭も此の話を聞き飯程困
つて居しい事情を四元の弟茶山と中略つ
て南郷の扶侯（中略）とする事とした。茶山
の意は敢て其姓を名乗らずともよろしい点
に角事情永久壁を嘗して其ん方がよいと云
ふことであつた北河の伜春子に就ては今現に弟
茶山の子孫に市時の霧亭の吉数か幸いる侯

奈さんとの間に、子がかすがいとなるのに、子供を
産む暇もなく、書状の文は長いから眼すが、南
時雨亭の父は七十翁で、雨亭は早く廣
嫁の身となりそのみるかげもなく他姓を継く
の妻の無つたことい書状を伝つても伝はれる。丁
度其頃茶山は江戸の高邸へ日上京し、雨
亭は家業をしてゐたが、さて妻を娶ることに
ハ面倒なる異議が無く宴を動めたらとて、
茶山が江都から帰くると時儀が済んで、北の夫人
ハ井上敬と云夫その一人の子があつた、北の婦人の
家は茶山の実家であるうと茶山の別居したので
ある、大きな酒造家である。姓の家に就て雨亭

榛原製

の書状の一節を左に掲ずる
北姪と申ハ先生ののいうて、二十四五歳の人とおの
甥（茶山伸弟沖梗の子）が某（忘年）の家とて、
菅氏の本宅酒造家の主人と者と家、二三年以前
其夫死去、其妻子五才許の男子一人（菅三後自牧
雨惟繩）有て、こんを望長の後菅氏を右酒家
為にさせ積のもれ候、只今い彼方の家あけ
こ先生家に来り居く人也、この家田地七百石、酒
造の株も有之家也、元来菅氏ハ酒造家之
御祖の巨家と有之、先生ハ三十年前迄ハ
醫を業とし秘伝ハ、然る家右に宅家を焼
失い以来、其内先生ハ医をやめられ而、まら学問

一道こ和成候ゝ本書（崇山書牛）土二ゟ（書
宜）お積、先生の指し後ゝ京、右土二ゟ京都
ゝ出候而答元、先生ハ右今の廉藍の方ゟ
川辺ゟ書生教授ゟ頂いたゝ。京、福山辰ゟ
手人扶持金十五両とせゝん扶持ゝ今の学問
所取建、倉家等除地除役ゝ成、永世学問不
と成さゝん事と候、先御先生物（著書）著の酒家
本宅お積いたし居申候、先生無恙の人扶ゝ
右扶持方ゟ年分入用の銭計ゟ近ゝ四地ゟも
もとめ、学問不の方ゝつけゝん、大方ゟ毎ゝ三
十俵ゟ五ゟ俵ゟ上り候ゟ候ゟ
路ゟの北の寄事倫ハ寄ゟ一束
の書簡ゟ秋料ゟも出来ゟるやうゟ
ある、一の成書簡の記ゟゟ流ゟことゟつとめ頼ゟ
ことゟ申ゟ奉ゟ拙ゟの様ゟ拙くゟゟことゟ前
ゟゟ云ゟ比が志かし書学問の保存ゟ分ゟゟ後ゟ
ゟゟと大ゟゟ役ゟゟゟゟゟ、北條ゟ伝ゟゟゟゟ
うゟのけゟ路ゟ自ゟ
ゟゟ人の相ゟ
ゟ左のやうゟことゟ

北斗を祭るのが宜敷に於て有用の事が等
閑視せられんとする事が無いことに困らむ
ある

○義亭が我々に示唆を与へたことは知るべきもあるが
一向その森しいことを知らなかつた。移りの地係
で如何なる物を得た。義亭の北斗は文化丙寅廿
七年の時で次年丁卯廿八年の時である。此の北斗
の根本を尋ねた。此の名の聖民遍称司馬助、蒲原郡茨曽根村の
人で、仲彝と義亭の交りは義亭が京都に
北斗を如何にしたかである。
一年間も近くの内は仲彝は急死したので、義亭

八墓法を書くことをうけ、まんこ伝つて仲彝の人
となりをとえんとたのむくだりである
仲彝為人、温柔愛人、性解風流、服飾品
茶評香、古逸平泉石花卉之間、又好丹青
之技、博学自娛、毎謂人生不一の不満之事、
而獨可之師、莫所就問、常以為憾、嘗少
年之客江戸、千里馳書、使人於法光北下、
求之、久而不果、仲彝掃榻日候、意予或不
至、至袖識上之、又寫去亦此地云
仲彝攻医、而無意於利根家に寄して子弟を教授した
らしい。後在前中の長岡城侯に三年滞留したことは隠れもない事実だが、

榛原製

雲母亭の北隅の時にも見たことがある、雲母亭は
服部と親戚であつた、其家に寄したことがある、服部
の妻は某し家に女子あらば其婿とまくきたれと云ふに
ると龜田の位を得て居れと云ふ。
○雲母亭が中碧山、生涯七手紙の所に左の記事
があり、遂に意を傳ふるに足る。
一度人の死前に間ひかあり、暫くしらべ候を、
醫也まいてえずい、法人米鍼池と申れ者
多く、四老及醫と申由、芝屋周防
三四尾の醫南部伯民が技癖程の者
り、伯民の北辰九鍼なるものを拙庵一の方の醫師なる
よし若未もあるべくこと存ぜ

東京都立中央図書館蔵書

閲覧室